

関山

かんさん

第3号



寺報 中尊寺



中国天台山参拝



中尊寺新能「国栖」

目次

天台智者大師の遺徳を讃仰して	貫首 千田 孝信	2
寺報ぐらびあ		5
天台山断想	佐々木邦世	9
報恩のしあわせ	三浦 道子	11
中尊寺中国参拝団に参加して	千葉タケ子	11
平泉から清涼な風を	遠藤 公男	13
野の花のひと	志賀かう子	16
賢治と中尊寺	原 子朗	21
平泉・文学散歩②碑を建つるもの		35
「質直意柔輓」	破石 澄元	38
関山植物誌③	清水 秀澄	40
梵焼供	破石 澄元	41
思い出すままに——詠讀四十年——	佐々木高円	43
風信／語録		45
〔陸奥教区宗務所報〕		48
執務日誌		49
曼荼羅結縁		57
浄財御奉納者御芳名		58

〈表紙「関山」貫首染筆〉

天台智者大師のご遺徳を讃仰して

貫首 千田孝信

天台大師は、釈尊が説かれた八万四千の経典のなかから、「妙法蓮華経」いわゆる法華経を最高のお経として選びぬかれた方です。法華経は、誰にも差別なく平等に仏性がそなわっていることを高らかに証明したお経で、天台宗を天台法華宗と申すほど、天台宗の根本経典となっています。

今の時代でこそ、基本的人権すなわち出自・良心・思想・信条の違いを問わない平等の権利が憲法で万人に保証されていますが、古代インドでカースト制という、差別が当然視されていた社会に於て万人の平等を提唱した釈尊の経説は、革命的な意味合いをもつ提言だったわけですから。

人間に差別があってはならない。男女の差別もなく、善人悪人の差別もなく、みな平等に仏に成れることを法華経は説いております。これを「法華一乗」と申しまして、万人が差別なくひとつの同じ乗物に乗って仏の世界に到達しようというのが法華経の根本の精神でございます。天台大師は、この「法華一乗」の精神を、釈尊が最も円熟した時機に説かれた最高の経典として、高く評価された方でした。大師のこのお考えは、「法華文句」・「法華玄義」の二著に精緻をきわめて論証されてございます。

人間が仏と成ることができる潜在的な可能性を仏性といいますが、われわれ凡人は折角この尊い仏性を持っておりながら、人間の奥深くに根差す根源的な欲望・煩悩に覆われて仏性を照らし出すことができないでおります。菩薩・仏のような殊勝な心がけになるときがあるかと思えば、瞬時にして、

反対に、餓鬼・畜生におとらぬ邪悪なところを抱くのが、人間の悲しい実態なのでございます。だから仏・菩薩のような善人ですら、時には地獄に落ちる虞れもないわけではない。反面、餓鬼・畜生のような悪人でも、時には菩薩・仏のような慈悲心を抱くこともある、というのが大師のお考えです。これを大師の「十界互具」の思想と申しまして、大師の人間洞察の深さ、人間理解の幅の広さをあらわしていると思っております。

ですから天台大師は、人間の幸・不幸を分けるものは、運命でも環境でもなく、一にも二にも、自分の心の持ち方ひとつにあることを繰返し強調されました。これを大師の「一念三千」の教えと申しまして、自分の心の主体化・純粹化するわち仏性の開眼によって、われわれの生き方が光輝く人生となる経過を詳しく論証して下さいました。「自分が変われば相手も変わる」のです。自分の心の在り方ひとつで、幸せな菩薩にもなれるし、不幸な餓鬼にもなってしまうわけなのです。

そこで大師は、人間の仏性の花を開かせるための修行法として、止観（瞑想・坐禪）を提唱されました。人間は外界からの餓鬼・畜生の情報の洪水によって、とかく主体性を失い価値の混乱に陥ちこみやすのです。地獄的な情報を切り捨てて、心をひとつに止めて菩薩・仏の心になる観法を止観と申します。

さらに天台大師は、目に見える現実（仮）だけが本当の真実ではないこと。目に見えない理想の姿・理念（空）を心のまなこをもって見据えることの大切さを説かれました。そして理想を見据えながらも、遅（おそ）く現実を生きる生き方を「中道の生き方」として提唱されました。これを大師の「空・假・中」の「三諦円融」説と申しまして、大乘仏教の空の考え方を一層哲学的に深められたわけですから。天台智者大師から比叡山伝教大師へと伝えられた天台宗の教理と行法は、勿論いまお話したこと

に尽きませんが、千四百年の歳月を経た現代にあっても、いや、精神の危機的状況にある現代であつてこそ、課題性に富んだ問いかけを、われわれに投げかけていると申せましょう。



天台大師御影（中尊寺蔵）

今年、中国天台山で修行され、天台宗の教理と観法を確立なさつた天台智者大師の千四百年のご遠忌に当ることから、天台宗を挙げて大師のご遺徳を讃仰する行事が展開されている。

天台大師は、西暦五三八年、中国の華容県に生れた。十八才のとき長沙で出家、智顛と名づけられ、二十三才にして大蘇山に慧思禪師を訪ね、七年間難行苦行して開悟された。金陵（南京）で皇帝以下百官に説法、さらに天台山の幽寂の地で八年間練行を重ね、華頂峰上で魔を降して悟りを深め、「法華文句」「法華玄義」「摩訶止観」の、いわゆる天台三大部を講説された。五十四才のとき、国王から智者大師の称号を賜わり、有名な隋の煬帝の代、西暦五九七年十一月二十四日、石城寺に於て世寿六十才をもって示寂。没後四年、大師のご遺徳を仰いで国清寺が天台山に建立され、ご遺体は同じ天台山仏隴の西峰、真覚寺の智者肉身塔下に葬られた。

その精緻をきわめた思索は、仏教史上比較を絶した無双の碩学と尊ばれ、その苦行練磨の行徳は、今もなお「中国の釈尊」と崇められている。

寺報

ぐらびあ



* 「紺紙金銀字経」戻る

……五月

世に「中尊寺経」として知られる紺紙金銀字交書一切経は、清衡公の願経で、我が国の装飾経の白眉とされる。しかし秀吉のときに当山から持ち出されて、高野山金剛峰寺や、大阪の観心寺などに多く所蔵され、諸所に散在するものも少なくない。

昨年、「賢劫経」「伽耶山頂経」の二巻が中尊寺に帰り、今年さらに「諸法無行経」巻下を買い戻した。

権力の周辺に蠢いた人々の我意・偏執は、その時代の人間を苦しめるだけでなく、後々の人にまで苦痛をもたらす。しかし、われわれはこうして後始末できる時代に生きているだけ、幸せというべきかも知れない。

* 天台山で報恩法要

中尊寺訪中参拝団

……六月十四日～二十一日

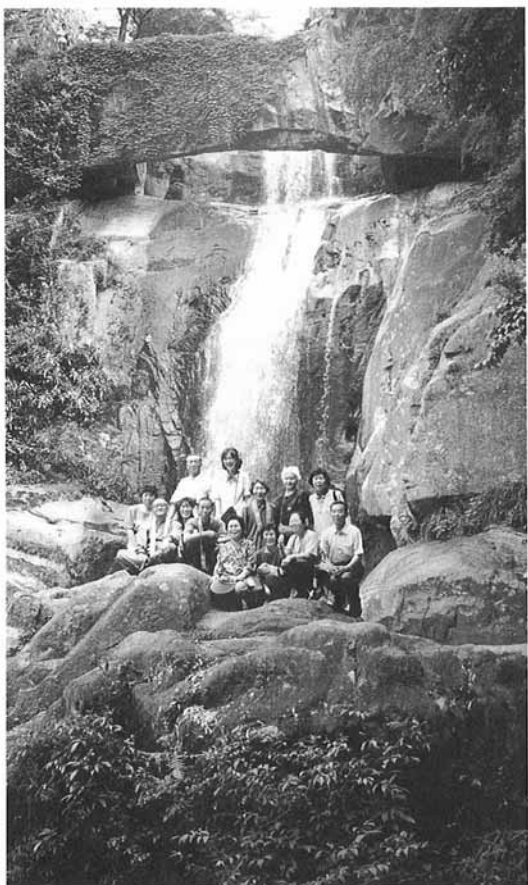


今年、天台大師一四〇〇年の大遠忌にあたって、宗門は挙げて祖師讃仰、報恩の誠を捧げる諸行を展開している。

中尊寺でも、独自に参拝団を組んで三二名が訪中。国清寺で千田貫首



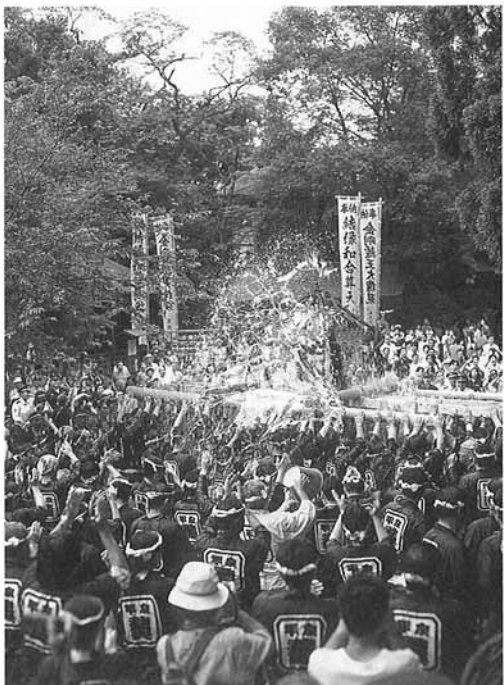
導師のもと、報恩法要を厳修した。福聚教会中尊寺支部のご婦人方が唱える大師報恩の和讃は、天台の峰々に響いた。真覚寺の智者肉身塔を拝み、かの石梁飛瀑（石橋）や石城寺・峰山道場跡などを巡拝した。



*** 水かけ神輿 初渡御**

……七月二十日

昨年の平泉開府九百年祭に、東京富岡八幡宮の神輿を迎えたのがご縁。威勢のいい水掛けを初体験した町民の興奮と好感が参加する祭りを志向。



ついに平泉神輿会・奉賛会の結成、自前の神輿を製作、平泉総社神輿と銘打って初渡御。

「平泉の、東北の将来を背負って立つ若い方のエネルギー源に」と貫首の挨拶。清めの水掛けは水攻めに近い態で「もう、富岡以上」の声。

*** 中尊寺新能**

……八月十四日

本年度第二十回。「玉葛」「国栖」狂言「樋の酒」。国栖の子方・亡命天子には、一山常住院の佐々木亮王君（小学二年）が、立派に勤めた。



*大正大学校外講座

夏安居 ……九月二日～四日

大学の、一般者を対象にした講座で、今年も「中尊寺と藤原文化を訪ねて」の実践学習に二四名が参加。

開講式のあと諸堂参拝・記録映画・講話。食事はすべて精進、食作法による。夜は御詠歌の稽古と謡曲。

第二日は、朝勤行・貫首の法話。

この日は泰衡公の法要あり、金剛界曼荼羅供に随喜して二時間ほど正座。金色堂まで練行。

午後は、二班に別れて境内と町内の遺跡発掘を体験。早速、カワラケを掘り出したりして、成果は大。

最終日は、早朝五時半から座禅・

写経とつづき、毛越寺参拝で修了。

過密日程の夏安居も、全員満行。



朝のご法話を聴聞して



発掘調査の体験学習



写経

天台山断想

□「中国で伝教大師の新たな聖地発見」の見出し。五月八日付の『比叡山時報』一面の記事である。最澄和尚は、貞元二十年（八〇四）唐に渡って天台山に求法巡礼したあと、翌年二月までかかって台州臨海で仏典を求得書写し菩薩戒を受戒。それから越州に行って順眺阿闍梨から密教・三部三昧耶を付法されている。それが「鏡湖の東嶽峰山道場」と記されているが何処かわからなかった。その峰山（ラーシャン）道場の遺跡が特定された、というのである。越州府は現在の紹興である。折しも我々の天台山参拝を前にしての情報で、「峰山まで行けないか」という話になった。

□六月十七日、バスは昼すぎ紹興に入った。王羲之の蘭亭見学までが予定されたコースであったが、そこを覗いてから峰山遺跡と特定された所まで走ってもらった。紹興から東に三十キロ、中塘鎮（村）という所でバスを降りた。踏切をわたり二十分ほど歩いて其処に至る。山と言うより高台である。砂岩の急斜面を草や枝葉に掴まって登る。大きな巖塊は石仏の頭部である。顔面が欠落していて、傍に螺髪の一部が転がったままになっている。



佐々木邦世

□峰山は、日本天台宗にとって、顕密一致の法燈の発端の地になる。現地踏査された関係者を別にすれば、皆さんが峰山団参の第一号です、とガイドの王氏に言われた。その遺跡に付って、貫首が話されたのが本誌巻頭の天台大師遺徳讃仰である。こうした天台学の解説も、いよいよ明日は天台山参拝と思つてこちらが聴くからか、「十界互具」とか「三諦円融」など初めて耳にした人も、それなりに受けとめている様子である。さつきから、遠くに雷鳴が響いている。

□翌朝は六時に紹興を発つた。天台大師が入滅された新昌石城寺を巡拝して、漸く国清寺に着いた。衣鉢を整えて豊干橋を渡り、「隋代古刹」の照壁に至る。方丈楼で国清寺首座・静慧法師を表敬。持参した(金色堂1/50模型)ほかを奉納して微とした。大雄宝殿で天台大師報恩法要を厳修して、かつて清衡公が吾朝の延暦・園城・東大・興福等の寺より、震旦の天台山に至るまで寺ごとに千僧を供養したと、『吾妻鏡』に記す中尊寺衆徒らの記述を、私は目の当たり、貫首が「表白」を陳べる姿にそれを重ねて見ていた。

□天台山で、欠かせないのが真覚寺(智者塔院)と石梁飛瀑である。本によると、仏隴(隴は峰)の金地と銀地の交わる分水嶺の尾根上に大師の塔廟はあつた。バスを降りようとしたとき、急に夕立が烈しく降りだした。車内で待つこと十分、嘘のように雨が止んで、みな洗心された面持ちで塔院に詣でた。口籠もったように、だれも何も言わない。大師の塔廟に参り至つたという、ただその思いに身を浸している感じであつた。帰り径、あちらが銀地ですと説明されて見下すと、山裾に溜まった霧がまさに銀地を実感させる。そういえば以前、五台山でも地形と気象が光の幻影を見せてくれたことがあつた。仙山仏界と謂いつべしである。

□寧波(ニンポー)で、「天一閣」という記念館に寄つた。ふと小さな石碑に目を凝らすと「日本国太宰府居住弟子張寧、捨千砌路一大功德奉獻三界諸天」、乾道三年(一六七)四月と刻している。寧波は日本との交易港・明州である。太宰府だけでなく、奥州平泉にも海の道は通じていた。宋版一切経や、出土した青磁や白磁もここから舶載されたのである。

(門東院住職)

報恩のしあわせ

三浦道子

千田貫首様を団長に戴き「中尊寺 天台山参拝・中国の旅」に福聚教会の会員有志十名と共に参加させて頂きました。

天台山国清寺大雄宝殿での報恩法要に和讃を奉詠できる喜び。前日、木の根にすがりながら登つた峰山道場遺跡。竹笹の中に肩より上だけの石の大仏様の、螺髪をみせて散らばる光景に想いを馳せ、宗祖伝教大師様の東支那海を渡られた御労苦を偲びつゝ、讃仰和讃をお唱え致しました。また、昨年遷化された丸岡円昌先生御作の「天台大師報恩和讃」を参拝者一同で唱和致しました。国清寺より赤城山に連なる峰々のなだらかな稜線を遠望し、私たちに御詠歌をご指導下された先生の温顔を思い浮かべ、遠く群馬の地よりはるかに大師報恩の想いをよせられた御和讃をお唱えさせて頂きました。

「谷間に水汲み薪採り」岩石の山肌をみせる絶壁が重なる峰の道をバスを連ねて、お大師様降魔止観の華頂講寺にお参り出来たときの感激は今も胸によみがえります。

ひと刻夕立のような雨が通りすぎて、その爽やかさの中を真覚寺に詣でました。
南無高祖天台智者大師の御宝号を心に念じながら肉身塔を拝し、「お詣りにきました」と両手を合せ、天台大師様を拝し、一千四百年御遠忌法要参拝の有難い仏縁をいただきましたことを感謝致しました。そして、有縁の方々のお力添えと健康であることのしあわせを感じる旅となりました。

(福聚教会中尊寺支部)

中尊寺中国参拝団に参加して

千葉 タケ子

去る六月十四日から二十一日までの七泊八日にわたり、中国参拝団三十余名の一員に加えて頂き、念願の天台山を参拝することができました。

六月十八日朝、紹興よりバスで天台山に向かいました。道中のどかな田園風景を左右に約五時間、漸く天台山に着。途中、天台大師の入滅の寺院石城寺(新昌・大佛寺)を参拝、大師のご遺徳を偲びました。

天台山国清寺は、「隋代古刹」と記された黄土色の土塀に囲まれ、緑深い木立の中に悠久の時の流れといった雰囲気気が漂う壮大な伽藍でした。

表敬の御挨拶があった後、大雄宝殿ご宝前に団員一同が揃い、団長千田孝信師の御導師のもと報恩法要が執行われ、私どもは「天台大師報恩和讃」を奉詠。高祖天台大師の聖地に詠歌の調べが響きわたり、名状し難い感動を覚えました。国清講寺の参拝を終えた一行は、次に天台大師が悟りを得たとされる華頂講寺に詣りました。こちらでは日本の天台宗の支援で再建の工事中でした。来秋の落慶を目ざしている由で、その時には花をお供えに再び詣でることの出来ずを念じました。

それから石梁飛瀑や五百羅漢で有名な中方広寺を参拝。直下三〇メートル余りの壮大な景観に一行は一瞬息をのみ、その場に立ち尽くしてしまいました。

天下の名勝地に名残りを惜しみながら次は大師の靈廟真覺寺を参拝しました。

私達訪中団は陸海空をかけ巡る大変な旅でしたのに、好天に恵まれ素晴らしい巡拝でした。伝教大師が幾多の困難

を乗り越えて、この聖地に天台法門を求められたことに改めて深い畏敬の念を覚えるとともに、高祖天台大師の偉大な足跡と業績にたゞ驚嘆するばかりでした。

この旅の感銘は筆舌に尽くし難いものがありました。特に重なり合う峰々を縫う様にして登るバスの車窓から眺めた、秘境と呼ぶにふさわしい天台山の光景は強く印象に残っております。また、諸所の古刹ではこの国の参詣者が熱心に礼拝する姿に遇いました。北京では、はるかな尾根に連なる巨大な城壁万里の長城。絶大な権力を象徴するような故宮。怒濤の様に流れる自転車の隊列等々、感動を覚えたことが沢山ありました。

車が郊外に出ると、あひるや牛が、広い車道をのんびり歩いているような牧歌的風景も目を楽しませてくれましたが、また市内に入ると高層ビルや高速道路の建設が急ピッチに進められており、この国の古代の顔と現代の顔が同居している姿が印象的でした。

年毎に大きく変貌しつつある中国を、再び訪れる日の来ることをこころに念じながら機上の人となりました。

(毛越寺薬王院・寺婦)

平泉から清涼な風を

遠藤 公 男

中尊寺では一山の清涼飲料水の自動販売機を撤去したという。

近頃でない快挙だろう。清涼な風が中尊寺から吹いてくる思いがした。

これからもゆきすぎた商業主義や環境破壊に警告を発し、迷える社会に灯をかざしてほしい。

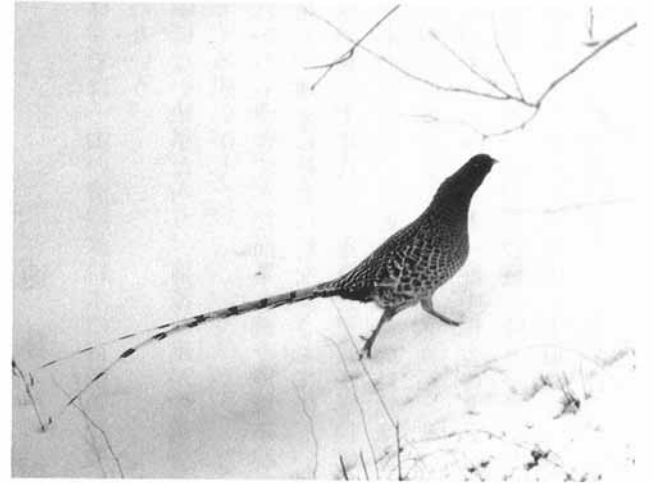
私は昭和二十年代に三年ほど平泉小学校に勤務した。あの頃、みんな貧しかったが自然は豊かだった。宿直勤務の夏の夜にはヨタカが、キョキョキョキョキョキョキョキョと一晩中学校舎のまわりで鳴いていた。二羽、三羽と校庭に降り、赤い目玉を光らせることもあった。水田の小道にヨタカが生んでいたら、白っぽい卵を子どもが持つてくることは珍らしくなかった。

ヨタカは宮沢賢治の作品で名高い。夜空を大きな口をあけて飛び、入ってくる蛾とか羽虫を食べ

る。だから体にぶつかると飛ぶ虫がいなければ飢えてしまう。その上ヨタカは夜、道路に降りるくせがあつて、オートバイや車にはねられて死んだ。交通量が増大し、虫が激減する時代にヨタカはついてゆけない。

夕方、祇園への裏道を帰ると、緑の水田の中からヒクイナの声が聞こえてきた。カッカカッカカッカカカカと次第に高くなる声で、水鶏が戸を叩くと、万葉の歌人が親しんだものである。中尊寺の沢田では稲株に巣をかけて、水中のトンボのヤゴや生きものを食べていた。やはり農業に弱い。ヒクイナもヨタカも初夏に東南アジアから渡ってくる。ありふれた夏鳥でどこにでもいたが、もう全国的に稀になった。

猛禽類は生態系の頂点にいる。平泉の善阿弥ではハチクイという中型のタカが、人家の後ろの木にむぞうさに巣をかけていた。ハチクイは蜂の子を巣ごと好食するタカである。子どもがツミという最小のタカの幼鳥を拾ってきたこともあった。中尊寺のヒバの巨木にもトビではないタカの巣が



あって、三羽のヒナがいた。これらは平泉の自然がどんなに豊かだったかを思わせる。
ハチクイもツミも激減で、今では見ることもむずかしい。県内にはもういないのではあるまいか。あのヒバの巨木も消えて、あとは車道になっている。

三月には、光堂をめぐる木立のあちこちでヤマドリのホロ打ちが聞こえた。その頃、堂近くの雪を除けて戸板を斜めにし、ネズミモチの実を餌にしたワナをかける人がいた。ヤマドリが入ったら紐を引いて戸板を倒し、捕まえて食べたという。

中尊寺にヤマドリがたくさんいたとは、信じられない話である。藤原四代が栄えた頃もそうだったのだろう。十年くらい前、大きな駐車場ができるまではキジもいて、しだれ桜の下でケンケーンと鳴いたりした。もうキジもない。

近年、夏鳥のカッコウ、コノハズク、クロツグミ、ツバメ、ヨシゴイ、アカシヨウビン、サンシヨウクイなども全国的に姿を消している。冬鳥もカシラダカなどの大群はいなくなり、ありふれた

鳥だったベニマシコも激減である。留鳥のホオジロ、モズ、スズメさえ全体的に減って、春が来ても鳥の歌わない自然が広がっている。

平泉の夏で思い出すのはセミしぐれだった。毛越寺の夏草や…の句碑の後のベンチに座ると、境内を圧していたのはヒグラシの声だった。学校のまわりにもアブラゼミが一杯だった。清水秀澄老師の話では、この夏は中尊寺でもミンミンゼミ、アブラゼミが異常に少なかったという。ケヤキの葉が夏にちぢれて落ちてしまう。不気味なことである。

奥州平泉文化は緑濃い自然の上に残っている。その緑にも危機がせままっているのだ。この五十年の変化はあまりにも急で、環境の破壊はどこでも限界を超えている。

夜、空路日本に帰ってくると、日本列島は光に包まれていることに驚く。都市はどこもライトがきらめいて百万ドルの夜景のようだ。幹線道路は車のヘッドライトで光の帯となっている。これを繁栄のあかしといえるだろうか。不足する電力を

補うために、ダムを造り原発を起こし、あらゆる生物の生存をおびやかして、まだ不足という。

中国や韓国、ロシア、東南アジアの夜は本当に静かで暗い。一部の街を除いて、どこも小さなライトしかともっていない。つくづく夜はこうあるべきだと思う。

この頃、名のある神社仏閣がライトアップをしたりする。白昼では見られない光景が闇に浮かぶのに、人びとは感嘆する。しかし、自然界ではありえない夜の白光で、たくさん生物が死ぬことを知っているだろうか。やがてそこは虫一匹いない死の世界となる恐れが強い。

中尊寺でも紅葉ライトアップの企画があったという。それを踏み止まったのはすばらしいことだ。平泉のもろもろをあやまりなく後世に伝えるには、自動販売機の撤去のようにオーバーユースを戒め、環境に悪いことは極力しないことだろう。

(作家・日本野鳥の会理事)

野の花のひと

志賀 かう子

深沢紅子野の花美術館が、盛岡市中津川河畔に漆喰白壁の三階建てのすがたで、このたび開館した。及ばずながら、私は館長をお引き受けした。

開館して一週間、画家深沢紅子がどれほどの意味合いをもって多くのひとびとに浸透していたかを、来館者の面もちや感想を通して、あらためて思い知る日々である。

引きも切らず訪れるひとびとの多くが、待ちに待ったこの日だったと語り、肉筆画をじかに見た感慨をもらして帰られる。

腰がくの字となった老婦人が、「あやー。うちの庭のふうりんかつらとまるでおんなじ！ なんとよく描けているこたあ。」

「そうなんですそうなんです。まゆみの紅い実がパツツと弾けると、ほに、秋なんですっけえ。」と感に堪えぬ様子。別の人はまた、

「わたしの庭にも、ここの絵の1/3の花がありません。でも思えばうちの花たち何と可哀想でしょう。紅子先生の花々は先生の優しさでこんなふう

に美しく生き返ってる。なのうちの花たちはひっそり咲くばかり！」と嘆息まじりに呟き、「毒があると嫌われ、みなからのけ者扱いのやまとりかぶとが、先生の愛情と筆にかかると、わたしのほんとうのすがたを見てください」と羞じらいながらも凛と立ってるではありませんか」と静かに語るひともある。

腕組みをして絵の意味を熟考することを要さず、作品の前に立てば、いさゝかの無理もなく作品との交流が生まれる。そして清々しい喜びに満たされる。これが、深沢紅子の稀有ともいえる魅力の世界なのだ、来館者と触れ合う中で、おぼろな輪郭でしか見えていなかったそのすがたを、明瞭なものとして掴みとった喜びを、私は日々享受する一週間であった。

深沢紅子是一九〇三年（明治三十六）盛岡に生れ、幼い頃から絵を描くことが好きな少女だった。

祖父が殊の外大切にしていた屏風をしげしげと見ているうちに、少女は「あそこにお月さまがあったらいいのにナ」と想い、想いつけばすぐさま踏台に載って筆で月を描き込む。

一瞬絶句した祖父は次の瞬間にはもう孫の頭を撫でたという。

「うまく、描けたな。」

深沢紅子の父四戸慈文は紳士服仕立てを生業としたが、もとは南部藩士。本業よりも熱心なのが、仏教者として、恵まれない人々の救済活動であった。

その父は、寺にも酒の席にも、当時の盛岡市長だった北田親氏の執務室にも、愛娘の幼い紅子をかかわらず連れて行く。山野を共に歩いて花の名を教えたのも父であった。

母は近隣の子女に和裁を教えていたが、弟子たちに、控えめにも嬉しそうに語ったという。

「うちの娘は、お絵コばかり描いておりゃんすたと。」

それら、心柔らかい肉親たちが作り出す環境が、

深沢紅子の人となりを形成する上での磐石な根となつたにちがいない。

盛岡女学校から紅子は女子美術学校日本画科に進み、のち油絵科・岡田三郎助門下に移り、卒業と同時に同郷の画家深沢省三と結婚してやがて五人の子の母となる。

はじめ二科会に所属した紅子は、その特質である抒情性と、次第に尖鋭化していく会の画風が合わないところとなり、安井曾太郎、有島生馬らと共に二科会を脱会、一水会創立に加わった。女性画家たちと相図らって女流画家協会の設立にも尽力、紅子は最晩年までその二つの画界に出品を続けたのだった。

九十年の生涯を通じ、その着実な画業と功績は枚挙にいとまがないが、美術館をお預りする者として、私がより広く伝えてまいりたいことは、妻として母として主婦として、余人が計ることの出来ない悲しみも踏み越えたであろう中で、九十年の歳月を、絵筆を絶つことなく歩み切った貴いすがたについてである。

深沢紅子の深奥につねにたぎるものは、描くことへの情熱、描くことを通して美にいたる哲学であったのだろう。その飽くことのない美への祈りは、家庭人としての煩雑な日常のいとなみの前に屈することがなかった。

服を縫い、毛糸を編んでは子らに着せ、料理を工夫することも得意であった。

夫君が外出する。とみるや、ソレツとばかりキャンパスに向かって作画に没頭。だからわたしは早描きになったの、と笑顔で語ったものだった。いつの時にも人をいたわることを忘れないおひとであった。自分が最もよい待遇を受けている、と触れ合った人みながい気分であった。

十年余り前、深沢紅子は三十八人の知人友人を描きまくり、「親しい人、優しい人」と題する個展を開いた。私もそのモデルの一人をつとめたものである。

展示会の幕が開き、モデルも一堂に会して語らううちに、皆一様、呆気にとられることとなった。三十八人それぞれが、自分がモデルの作品が一番

よい、と信じて憚らないのであった。すべての相手に、誠を尽くして向き合うおひとであったことの証しに外ならない。

このたび開館した展示室にひと気が消えると、私はひとり作品ひとつひとつに向かい合う。

ああ、一人一人に心ばせの限りをもって対したと同じように、先生は、それぞれの花に、優しさの限りを傾けたおひとだったのだ、との理解が、胸を突き上げるほどの手応えとなって響いてくる。

清らかなものが辺りの空気までをも清めて伝わってくる。これが、画家深沢紅子の、花にまなび、花に至らんとねがった祈りでなくて何であろうかと考えた。

描く花々はどれも野の花。自己主張をせず、競うことを知らず、目立たず、しかも所を得て好ましく美しい花々。さりげなくありながら、その実強い花々。

深沢紅子は折々語った。はげしい花よりも控えめな花、強い色より柔らかい色が好きだと。

平成四年三月二十四日、夫君省三氏他界。私は

電話でお慰めしたのだが、受話器の向こうから穏やかな声が返って来た。

「わたしはおじいちゃんより、一日たりとも先に行くわけにはいかない、そう思っていましたから、安らかに眠ったおじいちゃんの顔を見て、わたしは心から喜んでおりました。だからあなたも、どうぞ、喜んでくださいませ。」

感動で言葉を失ったのはこちらの方であった。

それから一年後、夫君の一周忌を滞りなく営み、夫君の主治医、看護婦、近隣の人々にお礼廻りを相済ませ、晩餉を美味しいわ、と食べて就寝。翌朝、ご長男の奥さんが眠ったまま夫君のもとに旅立たれた様子を発見されたのだった。享年九十歳。夫君と同じ一年目の三月二十四日のことである。

多くのひとびとにまたとない優しさを置き土産にした深沢紅子は、中津川のほとり、小さな美術館の中で、その野の花の絵を通し、おそらく永遠に、たしかなうったえを以って生き続けるにちがいない。

「優しさを野の花にまなびましょう。」

いのちが何かをそこからまなびましょう。所を得て、みんなでのちをあゆみましょう！と、作品を通して深沢紅子は私たちに、持ちまへの羞らいの面持で、しかし、おもてに見せぬ力強さで語り続けるにちがいない。

中津川に、はや鮭が溯上して来た。はじめて眼のあたりにするその光景は、まさに感動の一語に尽きる。

いのちの尊厳をまなぶ道場は、自然界のいとなみを、謙虚に見つめることに尽きるのではないか、その念を一層深くするこの頃である。

はるか二百キロの彼方、石巻の北上川河口から産卵の地ふるさとを目指して鮭はひたすら溯上、やがて支流中津川をさらに上って満身創痍、次代にいのちを託すや極限の生命を静けくも閉じていく。

それだけには終わらない。川面に浮かんだ鮭の遺骸にトンビやカラスが群がるではないか。

自然界の食物連鎖の成り立ちを、胸痛む中で見つめるとき、今更のように、ひとり人間だけが傲

慢を誇っていることに気付かずにはいられない。

深沢紅子は花を描くとき、

「描かせてくださいね」と花に語りかけるのを常とした。

「眼の前の花は今年限りの花。来年もその場所に同じ花は咲くけれど、でもそれは別のいのち。営々とつながるいのちであつても別の個体。だから一期一会なのですわね」と語つたものだった。

深沢紅子の世界の清らかさは、一期一会の真挚な愛情が、画家の力量と一つになった結晶であるうとおもう。そこに、人を打つ不思議な力があるのだとおもう。

美術館から見える中津川は、そこに遊び、花を摘んだ、幼き日の深沢紅子の原風景であつた。

(エッセイスト・野の花美術館館長)

賢治と中尊寺

原 子朗

今日は賢治と中尊寺ということでお話をさせていただきます。

「宮沢賢治と中尊寺」というテーマは、実はここに賢治の詩碑があるからというだけではなくて、非常に重大なテーマや問題点が含まれていて、研究者もあまりこのことを論じていませんので、今日は是非、この話をさせていたただきたいと思つてまいりました。

賢治は、中尊寺に旧制中学の四年生の時に修学旅行で来ております。今は、花巻からここまでは日帰りもできる、遠足といった感じでございますが、明治・大正の人たちの距離感覚、時間感覚というものに当てはめて考える必要があります。賢治は明治四十五年の五月の二十九日に平泉に来ております。二十七、二十八と二泊三日で、仙台・松島方面修学旅行ということで来たのですが、そ

の頃の中学生にとっては盛岡から仙台、あるいは中尊寺まで来るということは、当時の交通手段も含めて今の同年齢の高校生の感覚では考えられないということですよ。

時間、空間ということで申しますと、例えば賢治は三十七歳で亡くなっています。あまりの若死にと、今なら私どもは考えますが、三十七歳というのは、昭和の初めの頃までは、必ずしもそれほど早死には言えないかもしれない。日本人の平均寿命が五十歳になりますのが昭和二十二年です。今は、七十〜八十歳。時間ということでは、百年前、賢治の生まれた頃の平均寿命は、人口統計学の推算では大体三十七〜三十八歳です。そして、賢治が亡くなった頃、六十三年前の平均寿命は四十五歳くらいに伸びております。それから言うと、確かに七、八年は早死ということにはなりません。

賢治が中尊寺に詣でたのは、明治四十五年の五月の二十九日、そして盛岡に、夜の十一時過ぎの列車で帰り着いております。参考までに申します

と、ちょうど二カ月後に明治天皇が亡くなられまして、明治四十五年は、七月三十日をもって大正になります。明治天皇は六十一歳でした。当時は、四十歳を過ぎると隠居をいたしまして、自分のことを翁と自分で言ったんですね。昔の人は寿命が短かったが質的には高かった。

距離も短い距離を長く感じたということです。そのぶん、しかし経験の質は重かった、といえるかもしれません。たとえば「銀河鉄道の夜」の列車はどこへ行くのかという死の世界へ行く、帰ってこない列車です。モデルになっているのは花巻軽便鉄道です。今でしたら車で往復すると三十分から一時間で帰って来るところを、ずっと続いているような重い時間の意識、それだけ深い空間の意識です。百年でこうも違うんです。

明治四十五年（西暦一九二二年）、賢治は十六歳です。前に申したように盛岡中学の四年。仙台・松島方面修学旅行に総勢八十四名でまいます。午後三時三十分に盛岡駅を出まして一関に着きます。そ

こから北上河畔の狐禅寺に参りまして、一関から四キロを歩くわけですね。そして、外輪船といって、船の外側に車の付いている、それで水を掻く岩手丸という七十トンの船に乗りまして、石巻までまいます。石巻で一泊するわけですが、石巻を見学して、船でまた松島へ行く。松島瑞巖寺に詣でる。それから金華山を予定してあったんですが、風雨がひどいということで中止になりまして、塩釜に行っています。

塩釜で先生に特別の許可をもらって、賢治は一人で七キロの道を歩いて、菖蒲田という今も海水浴場がございますが、そこへ一人で大急ぎで行きます。実は、そこには自分が小さい時に、親以上に大きな仏教的な影響力を發揮してくれた平賀ヤギという、賢治の父の政次郎さんのお姉さんが旅館におりまして、療養をしていたんです。賢治がまだ三歳頃、彼女は結婚に失敗して宮沢家に帰っておりまして、その時に親鸞の『教行信証』や蓮如の『白骨の御文』などを、その平賀ヤギという伯母さんは全部頭に入っていて、子守歌のように

して賢治に聞かせた。幼児体験として、この伯母さんが口うつしに教えた影響は大きかった。

どうしてもその伯母さんに会いたい。それで特別な許可を得て、一軒一軒尋ねて回ったんです。そうしたらやせこけたおばさんが……旅館の人かと思ったら伯母さんであったと、父宛の感動的な報告の手紙に書いています。再会を喜び、あまりのことに、とうとうその晩は、先生との約束を守れないで、伯母と一緒に枕を並べて寝ます。そして、翌日大急ぎで仙台で合流するんです。間もなくこの伯母さんは菖蒲田で息を引き取っています。賢治の、家族や親戚、友達も含めて、他人を愛する気持ちというのは大変なものでありました。特に恩愛を受けた伯母と一晩枕を並べて、やつれた伯母を慰めます。盛岡から花巻の父親に手紙を書いていきます。

「小生は寂しさに耐え兼ね申し候。無意識に小生の口に称名が起こり申し候」とあります。賢治は究極的には法華経に傾倒しました。法華経というのは、しかし比叡山らしい仏教の中心の經典で

ありまして、比叡山にも賢治の詩碑がございます。詩碑の中で一番立派なのは、私は比叡山の中尊寺ののではないかと思います。中尊寺の詩碑については後で詳しく申し上げます。さて、この時の「称名が起こり申し候」は南無阿弥陀仏です。南無妙法蓮華経のお題目ではなく……。

また、賢治は学生時代禅宗のお寺に下宿して座禅を組んでおります。それから、親鸞や蓮如を伯母から口づてに暗唱してしまった。そして宮沢家の宗教は浄土真宗でした。それも十分体に入っているわけですね。それから「銀河鉄道の夜」などを見ますと、キリスト教が色濃く出てまいります。一口に申しますと賢治は混合宗教、極めて幅の広い総合的な信仰の持ち主で、それぞれの教義についても深く理解していたと言えるでしょう。

そこで賢治の短歌に入ります。

中尊寺

青葉に曇る夕暮の

そらふるはして青き鐘鳴る

桃青の

夏草の碑はみな月の

青き反射のなかにねむりき

「夏草の碑はみな月の……」これは水無月六月、中尊寺にお参りしたのが五月の二十九日ですので、旧暦にして水無月にしたんですね。「桃青の」は芭蕉の別号です。「夏草の碑」というのは「夏草や兵どもが夢の跡」、その芭蕉の夏草の碑は、六月の青い反射の中に眠っていると。「兵どもが夢の跡」を受けて作ったような短歌でございます。

「青葉に曇る」の青。「そらふるわして青き鐘鳴る」の「青き鐘」（老朽化して今は聞けません）。「桃青」というのはたまたま芭蕉の別号だからですけれどイメージとしてこれも青、「青き放射の中にねむりき」の青。賢治の作品にはいろいろな色彩が出てまいります、一番頻度の高いのは青です。これを心理学的に申しますと、実は内面の外面化されたものでありまして、青というのは

神秘的、内向的、複雑な心理のシンボルです。

それから、三行書きの和歌というのは賢治は得意でございますが、一行の和歌も、二行に書いたものもございますが、三行が一番多い。賢治の中学のちょうど十年先輩に、石川啄木がいて、盛岡の中学生はその影響で歌を作るのが流行だったみたいですね。啄木かぶれです。五、六人、優秀なのがいて、その中の一人が賢治でありまして、賢治は三年頃から歌を作り始めています。盛岡高等農林科の研究生の頃まで、十三歳から二十五歳くらいまでの間、ずっと和歌を作っています。約八百首あまりです。これが賢治の文学的出発点でございます。念のためいっておきますと、形態こそ啄木ふうですが、中味はすでに啄木とはまるでちがいます。短歌に盛りきれない複雑な内面性と謎めいた神秘性をもっていて、やがて詩に移行していく必然性を短歌は示しています。

その後、賢治は「冬のスケッチ」という奇妙な、短歌でもなければ詩でもないという、詩と短歌との中間形態の「冬のスケッチ」という詩的断章を

多く書いておりまして、これが大体二年間ぐらい続きます。大正の九年、十年頃のことです。

そして、同時に童話を書き始めます。旧制盛岡高等農林卒業後、研究生として残った大正七年の夏休みに最初の童話を書きます。それが有名な「蜘蛛となめくじ」と「双子の星」。そして大正の十一年（一九二二）頃から「春と修羅」という口語詩を書きます。それが童話と一緒にずっと続きます。そして、亡くなる前の二、三年の間は一生懸命文語詩を書きます。その文語詩を全部詳しく読んでおきますと、中学時代に書いた短歌がもう一度ここで蘇って、いわば拡大再生産されて文語詩の形になっていくものも多い。文語詩というのは、かつての新体詩なんかの文語詩と違って、もっとすごい文語詩ですね。明治の文語の教育を受けた人たちの文語の素養というのは、自然で、しかも驚くべき深さ、多彩さです。漱石、鷗外たちが英語とドイツ語が非常にうまかったというのは、実は和漢文の実力があつたから外国語も早く上達したんです。岡倉天心の明治三十三年（一九〇六）に書

いた『茶の本』という英語で書いた本がありますが、外国人も感心するすばらしい英語です。美しい英語です。私たちは今、何でもやっているように見えますけれど、実は薄まってしまっただけで、淡い浅い文化の量だけを豊かだと錯覚しているんです。

さて、この短歌の下に、（白きそらいとも近きにこの堂は青葉めぐらし）、……これはメモですので、ちょっと一行おいた形で

青葉もて繞れる堂に

うなじ膨れし僧ひとり

大いなる口を歪めて

像を指し

さりげなくそらごとを云ふ

（A）

「うなじ」というのは首筋、大きな口を歪めて、「そらごと」、うそを言う。これが短歌の下の余白にメモしてございまして、これをお手もの資料では、仮に私が（A）としておりますのは、推

敲箇所が多く、「中尊寺」という詩が二つありまして、「中尊寺二」と賢治が番号を付けております(B)に、やがて発展するわけです。

中尊寺「二」

白きそらいと近くして
みねの方鐘さらに鳴り
青葉もて埋もる堂の
ひそけくも暮れにまぢかし

僧ひとり縁にうちあて
ふくれたるうなじめぐらし
義経の彩ある像を
ゆびさしてそらごとを云ふ

(B)

弁慶堂の義経の像なんでしょうが、おそらくお坊さんが義経の来歴などを、したり顔でちょっと嘘を言っていたんでしょう、おもしろそうに。それを賢治は、見え透いた嘘を言っているという。この詩はただの皮肉ではなくて、賢治の文学性の一

つとしてユーモアということがあります。この頃は、賢治にはすごく悲しみに満ちた暗い話題ばかりです。つらいことも楽しく、少しおどけて見せる、といった要素がすでにここにも出ています。詩の中においてユーモアを表現するというのは大変難しいことです。これも別に悪口を言っているのではないのです。そして「白き空」の白。「青葉もて」の青。それから「義経の彩ある像」の彩。やはり色彩感覚に雰囲気があります。

さて次に、先ほど申しました「冬のスケッチ」の六枚目。詩と言おうか、短歌と言おうか、その中間形態のようなものです。

ぬすまんとして立ち膝し

その膝、光りかがやけり

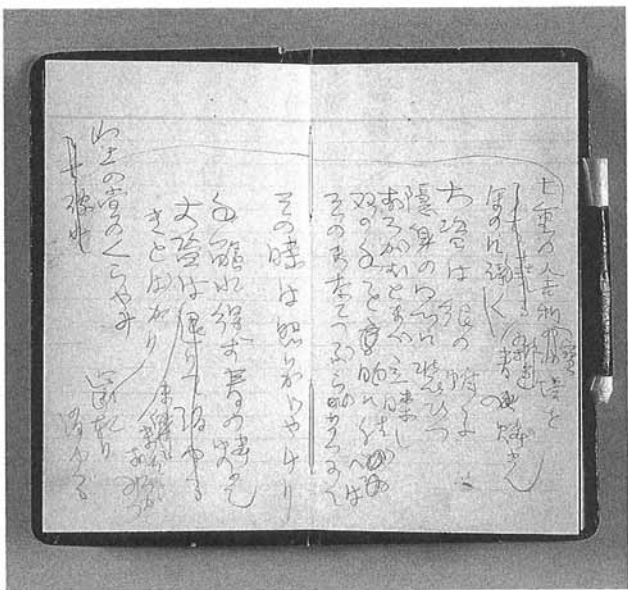
ぬすみ得ず十字燐光

やがていのりて消えにけり。

(1)

「光りかがやけり」という光輝性と言いますか、

ブリリアントな、キラキラ輝いているとか、揺れているとか、いつも賢治の詩や童話の中に感じられる光輝の動性がここにもすでに見られるのです。この主題は何でしょう。「ぬすまんとして立ち



膝し」は泥棒ですね。「ぬすみ得ず十字燐光」というのは、燐は人間でいえばカルシウム、骨の中に十分ありまして、骨粗鬆症というのは、このリン酸カルシウムが足りないんです。肥料の中ではすごく稲の腰を強くするものです。倒れた稲を起き上がらせる力もついています。賢治は肥料学の権威でございまして、燐に対しては子供の時から不思議なことばがいっぱい出てまいります。そういう化学的な知識もさることながら、ここで言うている「十字燐光」というのは、何か神秘的な、昔の……例えばフランスのユーゴーという詩人・小説家の名作「レ・ミゼラブル」の主人公ジャン・ヴァルジャンの物語、教会の燭台を盗んだりする「あ、無情」というのがありますね。当時、賢治もこれは読んだらうと思うんですが、それを連想させる神秘的な物語性もっている。中尊寺に泥棒が入ったんです。そして、十字燐光を盗もうとする。その十字燐光は何かというのが、「雨ニモマケズ」の手帳の中に、鉛筆の走り書きで書いてある

七重の舍利の小塔を
うち繞る青きの燐光
大盜は銀の帷子
隱身の黒に装ひつ
おろがむとまづ立膝し
双の手を胸に結びつ
そのまなこつぶらに黄にて
その膝は照りかゝやけり
手触れ得ず青の燐光
大盜は退りて消ゆる
きとばかり齒軋り消ゆる
〔山上の堂のくらやみ〕 (2)

「小」を消して「宝塔」に直しております。「うち繞る」としたのを消して「ほのに浮く」と直し、「青き」を直して「青の」。「隱身の」は身を隠すための黒装束。銀の帷子とは、「銀」という言葉も賢治は非常にたくさん使っておりますが、銀の帷子というのは珍しい。夏なら練つてない生の絹。冬なら練絹、いずれも裏のない一重の衣です。そ

れが銀糸を織り交ぜたものというのです。泥棒にしては異様で大物の大泥棒という感じですが。もしかしたら都から来たのではないかという文学的想像もされます。源頼朝のまたの姿ではないかとする谷川徹三氏の解釈もそこから出てくると思えます。「つぶらに」を「つぶらの」に直している。盗もうとするんだけれど。「大盜は退りて消ゆる」と最初書いたのを消して「またおろがみつ」に直している。最後の「山上の堂のくらやみ」これは一番最初の行にもつていく線が入っている。大泥棒の目はまん丸くて黄色、何かエキゾチックな感じがいたします。暗闇の中で照り輝いている青の燐光をなかなか触れることはできない。「きとばかり」は、チェツとばかり、舌打ちしながら、にらみつけ、齒ぎしりしながらおろがみて消えていく。盗み得ずまた頭を下げた消える。盗みとは下品下生の行為ですけれど、親鸞の教えをここで引用するまでもなく、最も非人間的なものこそ成仏できる。深々と頭を下げた泥棒は闇の中に消えていく。賢治の気持ちは、実はこの言葉の中に現

れている。深々と頭を下げた消えていくというのは、そこに泥棒の悔悟の念が読みとれます。すなわち、人間が仏に近づくきっかけをそこで得ると解釈しても、し過ぎではないと思います。

「雨ニモマケズ手帳」と呼ばれている手帳があります。賢治はいつも手帳を持っていて、首からつるしたシャープペンシルで、詩は、おおむねそういうふうにして書いていたといわれています。また童話の構想もそうやって手帳の中に書き込む今残っている手帳は晩年のものしか残っておりません。あの「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の有名な賢治のカタカナ書きの詩は、この「雨ニモマケズ手帳」のど真ん中にありますので、手帳に名前を付けて「雨ニモマケズ手帳」と私も呼んでおります。賢治が付けたわけじゃないんですね。その手帳の中に、これが出ている。

そしてそれを基にして、「中尊寺」という題の詩ができています、これはそのまま金色堂の側にある詩碑の、鉛筆書きのものです。鉛筆書きなんて

すが何と見事な、それをそのまま拡大して、昭和三十四年に刻まれたものです。手彫りですから、とっても彫り方に味がございます。

七重の舍利の小塔に
蓋なすや緑の燐光
大盜は銀のかたびら
おろがむとまづ膝だてば
緒のまなこたゞつぶらにて
もろの眩映えかゝやけり
手触れ得ね舍利の宝塔
大盜は礼して没ゆる (3)

「手触れ得ね」、「得ね」というのは「得ず」という打ち消しの已然形です。打ち消しの強めです。そのために手も「た」と読んだ方が音感的にも意味が強くなる。「てふれえね」あるいは「てふれえず」というのよりは、「たふれえね」と言った方が、「触れ得ねはすがあるまい」といった強い意味が加わります。

「きゆる」を「没」と書いてあるのが、また仏教的ですね。没我^{むつが}というときの没、大きな仏教的空間、仏のふところに呑みこまれて消えてゆく、と感じがあります。そうするとこの詩を読んで、「十字燐光」「青の燐光」の意味が分かります。二行目の「蓋なすや緑の燐光」。一行目の「七重の舍利の小塔に」の「舍利」というのは、サンスクリット（梵語）のシャリーラそのまま字を漢字に当てて、もともとの意味は白骨とか霊骨を言うんですが、仏教では骨塔、骨の塔のことも申します。それを納めているのが舍利塔ですね。ついでに舍利という言葉使いの出ている詩を一つ拾っておきました。

「冷たき朝の真鍮に」、この詩には題がありませんので一行目を題として全集には入っているのです。

つめたき朝の真鍮に

胸をくるしと盛りまつり

こ、ろさびしくをろがめば
おん舍利ゆゑにあおじろく

燐光をこそはなちたまへり

(文語詩未定稿中)

冬なんです。真鍮の器、仏様にお供えする供飯盛りの仏具です。それに「胸をくるしと盛りまつり」、晩年、賢治は胸を病んで大変呼吸に苦しんでおります。その時の詩であることは一目瞭然です。胸苦しくて咳が出る、それで祈りを込めて（ここでも「青白く」です）舍利を盛る。そして「こころさびしくおろがめば」、もう間もなく自分も消えて行く、中尊寺の詩でいえば、もしかしたら自分も泥棒かもしれない。

この舍利は御飯です。中国でも舍利という言葉葉を比喻として、御飯のことを言っております。それから「オシャリ病」で死んだ蚕の死骸を舍利とも言いました。あれも骨に似ているからです。

仏前に備えた御飯が燐光を放つ。それは十字燐光ではあるまいか。かつて中尊寺の詩を書いて「舍利の小塔に蓋なすや、緑の燐光……」を思い出したのかもしれない。そうすると、この大泥棒はもしかしたら、非常に身をやつした、目立たない

ように黒装束をしたままの賢治にも見えてこない。賢治は言葉盗む詩人であった。ありとあらゆる言葉を、百科辞典みたいにたくさん使っております。だから、とっても難しいと言えれば難しい。私は今、七年前に出した『宮沢賢治語彙辞典』の増補改訂に追われていて、そのことばの多彩さ、キラめく複雑さに、あらためて、こちらが泥棒みたいに「チェッ」とばかり歯ぎしりをつづけているのはいつもこの私なんです。そこで賢治の中尊寺の詩をこうして読んで、もしかしたら、中尊寺の十字燐光を盗もうとしたのは賢治自身ではなかったか。そして、深々と頭を下げて、悔い改めながらまた闇の中に消えて行く、というふうにも読めるのではないか、とも思ったのです。消えて行くということは、非常に重い意味を持ちます。仏の中に吸い込まれていくという幻想も、私は持つわけでございます。その「舍利の小塔」が燐光を発して、その上にあたかも蓋をしてあるかのように、天蓋と申しますね。「蓋なすや緑の燐光」。今度は青ではなくて緑になりました。色

彩豊かです。緑の燐光がパッと天蓋のように舍利の小塔の上に光輝いた。しかも「大盗は銀の帷子」。「おろがむ」とは拝もうとして、まず片膝をついて、「楮のまなこただつぶらにて」。「楮」は赤ですね。さっきは眼は黄色だったんですが、少し赤みを帯びてまいりました。「ただ」は強めて、真ん丸のぎょろ目で、「もろの肘」、「映えかがやけり」。燐光の反射を受けてはえ輝いている。非常に神秘的な光ですね。触れることはできない。「舍利の宝塔」、非常に物語的な場面のように、大盗は闇の中に消えていくところが意味深長であります。

これで物足りなくて、もう一度、今度はインクでちゃんと清書したのが、中尊寺「二」（４、略）です。「七重の舍利の小塔に」の下に二字空けて、「蓋なすや緑の燐光」と一行になっています。

この最終稿では、「手触れ得ず十字燐光 大盗は礼して没ゆる」。こんどは「手触れ得ず」に直しております。「手触れ得ね」はいかにも一般の人に分かりにくいと思われるんじゃないかと遠慮

したんでしょう。普通の言い方に直しております。「十字燐光 大盗は礼して」、深々とまた礼をして闇の中に消えていくと。これが最終稿なんです。だから本当は、詩碑にする場合は最終稿の清書をした方を詩碑にするのが普通だと思うんですが、これを撰された谷川徹三さんのお手柄と申してよいと思いますけれど、途中稿の鉛筆書きの方を詩碑にしてあります。出来栄えからして、私は不思議に賢治の詩としては鉛筆書きの途中稿の方がまとまりが良い。よくぞ途中稿の鉛筆書きの方を碑になさったと関係者の方々をほめてさしあげたいと思います。最終稿の方は、燐光が繰り返されたり、全体の詩の言葉の安定、ひき締まり方、等々で比較すると少々問題が出てくるように思われます。

さて、賢治は、どうして中尊寺にこだわっているのか。さらに彼には「文語詩篇ノート」というのがあって、子供の時から記憶をずっとそのままノートの中に書き留めております。「文語詩篇

ノート」の中の「十七、一九一二」というのは、一九一二年で、これは明治四十五年のことですね。さっき言った修学旅行の年号です。十七というのは賢治のノートの記号です。その時の記憶をここに、また後に蘇らせている。「中尊寺。偽ヲ云フ僧。義経像。青キ鐘」この四つの言葉はキーワードみたい、四つ並べてございます。そして×印が付いております。この×印は文語詩にしようと思つてメモしておいたのを、文語詩にし終わったものに付いているんです。済んだのは×を付けてたんですね。

さきに申しますように、和歌が彼の文学の開眼をした。そして、詩を書き始め、童話を同時に書いています。そして文語詩。「何もなくても、この文語詩があるからなあ」と賢治は妹たちに言っております。文語詩にはすごい意気込みをかけている。口語詩とはまたちがった、凝縮された、ひき締まった詩を試みてみたい。そういうのが彼の文語詩だと思います。

現代詩も口語表現の、ややもすればしまりのな

い饒舌性にかなり冒されている、という反省が私たちにもあります。賢治もそれに近いものがあつたのではないかという気がいたします。同じ心象スケッチの方法で、むかし短歌以降で試みた文語を使って、おしゃべりになってしまわないような、ぎりぎりにひき締った手法で詩的集中をやってみよう、そうした中で、かつての中尊寺体験や短歌がよみがえってきた。その中尊寺へのこだわりは、いったい何だったか、ということが問題になってまいります。

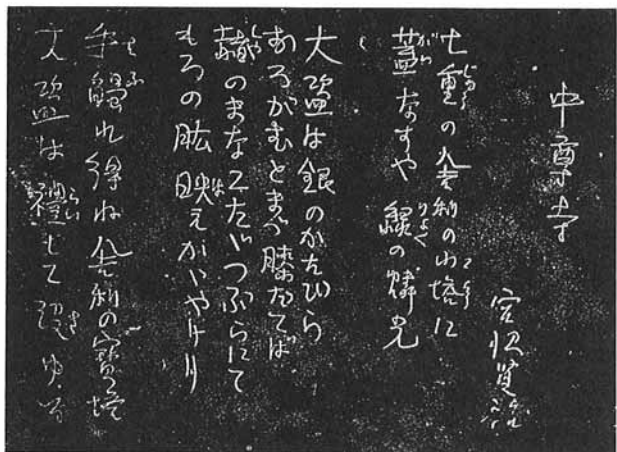
藤原三代の夢の跡。中尊寺を含めて、藤原三代の文化とは何であつたのか。単なる都のイミテーションではなかつた。北上川と衣川の接点の所に、輝くばかりの、文化の町をつくりたい。東北の都です。京の都とは違った、土俗的なこの草深い蝦夷の地に、蝦夷人、清衡は新しい集約的空間をつくるわけです。中尊寺を清衡はどう思つて創つたか。単なる都に対する対抗意識や、都の文化のイミテーション、コピーを創ろうとしたのではない。

東北独自のオリジナリティをここで創りだしたい。都を欺くばかりの美しい文化の空間をつくろうとした。実にそこにこそ、賢治は強く引かれたのであろうと、私は思います。賢治も、大都市・東京という中央に対して、いわば反逆的な姿勢を保ち続けました。しょっちゅう、しかし東京に偵察に行つて、東京のものを盗んでおります。大泥棒です。世界中のものを賢治は盗んでおります。大盗です。その右肘は光輝いている。

しかし賢治は、この貧しい東北をなんとかしてドリームランドにしたい。文化の都にしたい。「降り下ろす鍬の光輝く」、「光り輝く」というのは彼の好きな言葉です。理想です。いつも鍬や土が輝く。そして音楽、農作業は音楽である。農作業を楽しくてしょうがない舞踊にしたい。貧しい東北の小作農はみな苦しんでいる。だからこそ、賢治は東北をその苦しみから解放したい。イーハトーブと呼んだのは、単なる岩手の言い換えではないのです。これは陸中国・岩手県のこととってはおりますが、単なる言い換えではない。単にハイ

碑を建つるもの

〈詩碑除幕式の榮・再現〉



賢治の詩碑は金色堂参道の右手奥に在る。「中尊寺」と題する文語詩で、鉛筆書き筆跡を拡大して刻っている。詩文の推敲については、本誌原子朗先生の「賢治と中尊寺」に詳しい。昭和三十四年の詩碑建立の経緯については、除幕式の榮が資料としても貴重なのでここに再現することにした。その折りの、谷川徹三先生の記念講演「われはこれ塔建つるもの」は、講談社学術文庫『雨ニモマケズ』に収載されております。

金色堂建立八五〇年記念

宮沢賢治祭

昭和34年5月10日

詩碑除幕式

慶賛

宮沢賢治の会

合唱 平泉小学校児童

司会

- 一、開式のことば 佐々木 賢有
- 二、除幕 佐々木 亮徳
- 三、碑詩朗読 宮沢 潤子
- 四、献花 菊池 暁輝
- 五、経過報告 佐々木 実高
- 六、祝詞 谷川徹三氏
- 七、謝辞 外來賓各位
- 八、閉式のことば 菅野 澄六

ひきつづき

宮沢賢治先生霊位

金色堂合祀並に追福法要

記念講演 午後一時

われはこれ塔建つるもの

法政大学文学部長

於 金色堂
中尊寺一山大衆
於中尊寺本坊
谷川徹三先生

カラに言おうとしたのではないんです。むしろ世界の岩手県にしたい。中尊寺を世界の中尊寺にしたい。史都平泉を「都のイミテーション」と解説したものもございます。それは非常に一知半解な解釈です。藤原四代の理念は何であるか。これを大事に考えないといけないんです。そこに賢治は引かれた。むしろそこに自分を写した。賢治は東京の消費文化、現代の消耗的な都市文化に、あえて反逆しようとしている。そして、光り輝く縄文を再び、自ら実践しようとしている。たとえばリン酸を工夫し新しい肥料を開発して、陸羽一三二号をどんなにすばらしい稲にできるか、自分で苦労をした。「一日に玄米四合」と、玄米は出てまいりませうけれど、賢治が書いたものに「米」という語はほとんど出てこない。米は商品であります。米は流通する、お金に換算される食料であります。ところが「稲」という語は賢治作品には溢れるほど出てきます。稲と米は違うんです。生産過程としての稲。そして立派な米を作るところまでが俺たちの仕事だ。農民よ、稲を育てよう。

銀河系に生きよう。理想に生きよう。理想を現実たらしめよう——。これは、そのまま藤原三代、あるいは四代が考えたことではないのか。そこに引かれたんです。それが中尊寺にこだわった本当の理由だと私は思うのです。

賢治を、「俺たちの農業のことなど、何も知らないで、金持ちの道楽息子の、道楽だ」という農民も昔はたくさんいた。賢治はそれが悔しかった。悔しくて悔しくてしょうがなかった。そこに賢治の詩や童話がみられる。「恨んではいけない。共に生きよう。そして私は農民だ」と。何とかして農民になりたい、それが賢治の必死の願いだったんですね。

〔第三回・セミナー「東方」(六月二十三日)における、原子朗先生の講演を小誌編集子が成稿にした。〕

PROFILE

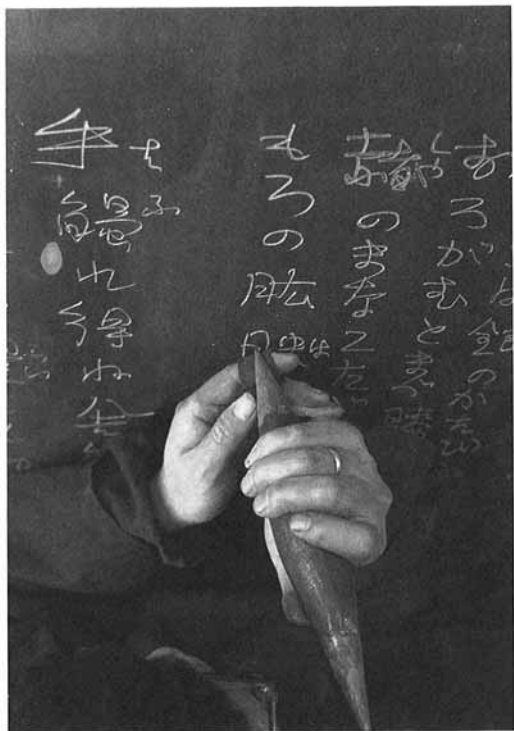
原子朗

詩人。宮沢賢治イーハトーブ館長。元早稲田大学教授。『火牛』『同時代』同人。長編詩『石の譜』(現代詩人賞)、評論・研究に『修辭学史的的研究』ほか多数。『宮沢賢治語彙辞典』の編著をはじめとする業績と新人研究者の育成に対して第三回宮沢賢治賞を受ける。

碑石 台石

高さ 1.2m 長さ 3.25m
 巾 1.5m 巾 0.84m
 厚さ 0.5m 厚さ 0.47m
 重さ 2.4t 重さ 3.5t

碑詩の創作年月は明らかでないが、昭和5年(35歳)に文語詩の創作をはじめているから、それ以後のものと思われる。また略名は森佐一(荘已池)氏宛のハガキからとり拡大した。



の詩碑が建ち、西行・芭蕉・賢治を結ぶ詩魂の新たな息吹きを見ることができてほんとうにお目出たいことだと存じます。

天台宗東北大本山 中尊寺
 菊池暁輝

詩碑が建つまで(葉より)

一昨年(昭和三十二年)九月二十一日(賢治命日)に比叡山根本中堂まえに建った賢治歌碑が機縁となり、中尊寺においても着目され、佐々木実高さんから小生に「当山に関する賢治先生の作品はないものか」との御質問を受けたので、「大ありですよ」と短歌・文語詩各二篇をお見せしたのが昨年の今ごろだったと思います。

それからお会いするたびに、このことについて話しあい、まだどの作品にするかの決定も見えないうちに、北上市の石材店和之内繁松さんに碑石の調整が依頼され、和之内さんもまたわざわざ石巻まで行ってその石をすで見つけてくるといった手廻しぶりでした。

この間実高さんと小生と清六さ

んと三人で詩の選択について協議し実高さんの主唱によってこんどの詩がえらばれました。実高さんはこれはたしかに金色堂を唱ったものだと言われ、たまたま金色堂建立八五〇年にあたるので、その記念としてまことに似あわしいということになり、しかも加えて賢治さん自身の原稿が保存され、それを拡大彫刻出来るという好条件もあったのですが、問題は鉛筆がきの草稿とペン書きの原稿とあるので、そのいずれを取るべきかについて、谷川徹三、草野心平、小倉豊文その他の方々に御意見をもとめた結果、鉛筆がきの方が奔放で面白いということで、その御意見に随いました。

それからの仕事は清六さんと小

生と、岩田豊蔵さんの三人合議で進め、倍率も二〇倍(左右天地とも四・四七倍)とする結論を得、写真引きのばしは盛岡の平野写真館に面倒をかけ、われわれ三人は北上の和之内さんに何度も通い、和之内さんにも一生一代の精進を願ひ、彫りは専ら同店の阿部芳治さんがこれにあたり、着手したのが四月五日という日時の迫り方だったので、午前二時三時から仕事をされたときいております。また台石も石巻まで再度行って、貝の化石のあとのある面白いものを見つけてくるといった精の入れ方でした。昨年天台宗東北大本山の昇格をみ年ごとに輝きを増すこの山に、世界のみんなの敬愛する賢治

(金剛院住職)

「質直意柔 軟」

多田厚隆前貫首を想う

昭和五十一年に、中尊寺では多田厚隆大僧正を貫首としてお迎えしたわけです。それ以前に「悉曇(しつとん)伝習」の講師としてお願いしたこともございましたので、一山の人は皆存じ上げておりました。まして、かつて大正大学で講義を受けた人も少なからずいましたから、何となく親しみが感じられたものです。

晋山されて間もなく、私ども當時若い者が中心になって、貫首を講師にお願いして、週一度勉強会を開くことにしました。『法界次第』『摩訶止観』『頓章合記句解』(慈山述)などをテキストとして講義をお願いしたものです。こうした場合にも、貫首は充分に前調べされて、素地の無い私どもに噛みく

だいて、丁寧なお話をしてくださいました。今にして惜しむらくは、肝心の生徒である私どもがその場限りの勉強で、折角の講義もその後に出る御酒で薄めてしまったことです。

多田貫首は、いつも静かに穏やかな語調でお話をなさっておられました。茶飲み話に「正しいことを話すのに、大声を立てる必要はない」と。そのままの口調で、天台の教義に立脚した厳しいことも



多田貫首の筆 澄元

お話になりますから、震え上がる思いもしたものです。時に駄洒落も交える気さくなところもございましたが、ただ一度だけ大きな声で私どもを諭したことがありました。

S新興宗教が、中尊寺で法要をするようになったときです。その教団とは多田貫首就任以前比較的朋友的におつきあいしていたもので、我々も安易に考えておりました。ちょうど中尊寺で藤原清衡公八百五十年の大祭を執行中で、その教団の法要を、大祭に絡めた形で行うことを、貫首をお迎える前に決めていました。そのような状況を知った貫首は、天台宗の教義を教宣する場として、断乎これを許しませんでした。後に勉強会

を通じて、この新興宗教の教義が、その原点において霊能とかを振りかざすなど、天台宗にはそぐわない、それこそ天台大師が魔事として拒んだものに他ならないことを知った次第です。

御参詣の方を本堂に迎えてお話しされることも度々ございました。そんな折りにいつもお話なされたことがあります。



金色堂は、ただ金箔が光っているのではありません。初代清衡公は大変なご苦労をされ、深い悲しみを乗り越えて

此の地方の平和のために、引いては国家の安穩のために、「浄仏国土」を建設されたものです。その尊い御精神を二代基衡公・三代秀衡公と引き継がれ大業をいよいよ大きく成しえたのです。そしてこ

れだけの大事業の中で、一片の手抜きもない。丹誠を込めたすばらしい仕事でした。このような御三代の尊い御精神の凝り固まったものが今日なお光り輝いている本質なのです。そのような意味では金色堂に眠る御三代は、呼吸こそ

していかないけれども、今なお立派(はた)に用いていると言えます。このようなお話をそばで聞かせていただきました。

多田貫首は、「何もやらないことも大切なことだ」と仰って、ハード面での事業よりも、人とのふれあいを大切にし、教義の上に座しておられたのですが、良く噛み砕いたお話で、人に深い感銘を与えられたものでした。

(一老 観音院住職)

富貴草と私

今を去る七十年前程前、私は一中学生だった。理科担当の吉田某先生から、関山山中で「シヨウジョウバカマ」と「富貴草」を探して来いと命ぜられた。前者はすぐわかったが富貴草については何の手掛りも無い。関心のありそうな人達から聞いて回ったが分からない。図鑑を集めて形態や生体を知った。処で仲々富貴草の発見に繋がらない。しかし一、二の図鑑に「観賞用として庭園に栽植せらる」と書いてあった。この一言によって力を得た。富貴草は必ずこの山にあると思つた。昭和十四年春召集されて大陸に渡つた。「富貴草」の事が妙に心に残つた。彼の地で筆談で富貴草のことを聞くと、知っ

てると云う。中国では「ほたん」の事を「富貴草」というのである。大東亜戦がはじまると南方に下ることになった。「内外植物原色大図鑑」(村越三千男・定価二十五円)で青島の本屋で購入し、同僚からいゝ物好きとひやかされたが、未だ見ぬ世界への好奇心からだつた。足掛け八年にして終戦を迎え翌年帰還。昭和二十五年藤原氏御遺体調査の頃「宝相華の図案の基になつた植物は何だろう」、この事が寺で話題になった。居並ぶ人達は「それは牡丹だろう」と異口同音。異説を差し挟む隙も無い。私は別席で「富貴草」について、その葉の着き方特に上方よりこれを見た時の感じ、これこそよく宝相華につながるかと力説したが、一人の賛

成も得られなかつた。その後最も良くその特徴を現した個体を探しているが遂に見当たらない。以前見たような、宝相華文を髣髴とさせるような立派な富貴草は見当たらない。恐らくは他の美しい植物達と共に此の穢土を辞して他方の界に移りつゝあるのではないか。特に目だつて近辺に見えなくなつた植物は ○おけら(キク科) ○おきなぐさ(ウマノアシガタ科) ○ほたるぶくろ(キキョウ科) ○みやこぐさ(マメ科) ○ネジバナ(ラン科) など。このような現象は他の昆虫の中にもみられる。蟬が少なくなつた。鳥が少なくなつた。人間界への影響もそのうち現われるだろう。気がついた時では既におそい。

(金剛院住職)

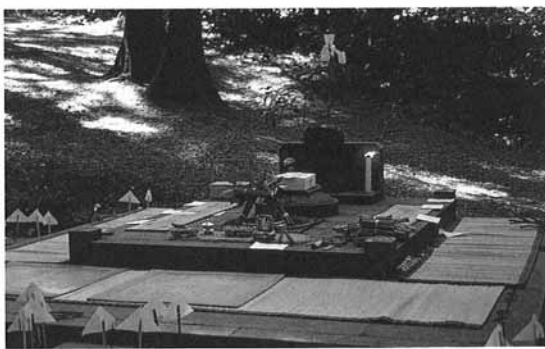
古来、中尊寺では子弟の教導に一定の階梯があつて、後住の予定者(通常は嫡男)は数え十四歳で得度受戒し、それより二十一年間は所化として修養階梯を勤めなければならぬ。この階梯にある者を「結衆」という。結衆の最上座を一和尚(役席)といい、次座を二和尚、次が三和尚となる。得度者は、天台会に初出仕してはじめて結衆の最下座に加わる。新参者の最下座より四人までは「下四人」と呼ばれて、いわゆる下座行を身におぼえ山の風に慣れることが要求される。

結果は、正月元日の夕座から八日朝までの堂籠り、夏は八月七日から十四日朝までの夏安居に開山堂に籠もるが、年臈からして役席

に上られる者は、事前に独り七日間堂に籠もつて「深秘行位」の伝法を修し、先々役から許可を受ける。その上で、結衆堂籠りに本壇(十八道行法または光明供)修し、「深秘行位」を修法する。一和尚以下の結衆は、その会座に冬は薬師経・仁王経・法華懺法・例時作法を、夏安居の会座には法華懺法と例時作法の読誦を日課勤行とする。

一和尚は、正月五日と八月十日に「秘密梵焼供」を遂行する。つまり堂籠り・夏安居の中日である。これに先立って堂内本壇で行ずる「行位」はこの梵焼供の初行ということになる。この梵焼供は、開山慈覚大師将来の秘法として受

け継がれた当山独特の野天護摩であつて、事相行法の他見・他言は許されない。



野天の石の護摩壇は清浄に掃き清められ、所定の上がり口や隅々には土幣と線香が立てられ、中央

の火炉には一定の長さに切った萩の束が積まれている。用意はすべて下四人の勤めである。壇に入るときには桶の水で手・口を清める。仏供の関伽水は、三和尚の次の座のものの専役で、当日早朝一時から二時ごろに、作法に従って暗闇のなか、沢を越えて汲んでくる。道中、人と会わないようにする。会っても挨拶などしてはいけない。護摩に用いる五穀は、下四人の上席から関伽汲みの次座までの者が用意する。

護摩の火が燃えさかると、結衆は濡れた青杉などを火に覆い、本壇を勤める一和尚に煙を向けて燃す。煙や火の粉が顔にかかって修法ができない状態になることもしばしばであるが、耐えるしかない。



身に近づく魔事、困難に引きずられないで、平然と修行することを教えているものであろう。梵焼供の座には、阿闍梨一和尚の側に先役が検僧として立ち会う。

秘法の護摩行法が厳密に、如法に修行されているかどうか立合い検見するのである。



思い出すままに

— 詠讚四十年 —

佐々木高円

夜分、提灯を手に出掛けていった母が、翌日、何か口に歌っていました。私はまだ幼かったころの記憶です。それが御詠歌だったとわかったのは、ずっと後になってからのことです。当時のことは、他に知る由もありません。私が中尊寺に出仕するようになりましたのは、終戦になって、昭和二十二年からでしたが、翌年、翌々年と大洪水が続いて疲弊困窮の極みです。実際、何ともならない状態でした。そこに、二十五年が藤原四代公の御遺体調査です。記者団の攻勢などというのも初めての体験でした。

その翌々、二十七年の夏に中尊寺で全国各流奉詠大会と銘打って、やったんです。大会直前になって、われわれも御詠歌というものを習ったわけです。俄かな話で、当時の貫主蘭實圓僧正、われわれは僧正様と言えば蘭貫主のことです。僧正さんが心配して稽古を見にこられたりしたことを覚えております。大会は大変な盛会でしたが、壇に上

がったわれわれは、汗だく。扇風機もなかった当時、本堂は四方を開放してあるとはいえ、廊下も敷居も人・人でしたから確かに暑かったに違いないのですが、やはりあれば、冷や汗だったと思います。

中尊寺では、故佐々木亮徳師が御詠歌の先生でした。亮徳師は、上野の寛永寺で修行中に習得され、昭和九年に自坊に戻られ、地元の篤信家岩間権之助氏の勧めで御詠歌を始められたと、聞いたことがあります。

わたしが最初に唱えたのは、「開宗のご和讃——宗祖はみ法を伝えんと」でした。一山で、一緒に習った方は、他にもいるにはいたんですが、結局、私ひとりみたいなことになったわけです。それで当時、亮徳師が寒修行の托鉢を始められまして、御詠歌を教わった関係もありますから、托鉢の方も一緒にということになって、十年続きました。

叡山流東日本大会は、三十年でしたか、現在の大会優勝旗はそのとき中尊寺が新調したものです。金色堂の伽陵頻迦の文様の立派なものでした。そうして、「金色堂和讃」

野尻政子

(鎌倉市・雪ノ下)

『東方に在り』

発刊に寄せて

残暑の中御健勝にお過ごしのごようす、お喜び申し上げます。このたび、平泉文化会議所が設立された由、また『東方に在り』創刊おめでとう存じます。ありきたりの、観光一辺倒の情報誌が多い中で、いかにも平泉らしく、格調高い点に感動致しました。また、グラフィック始め、カラーの写真もなかなか美しく、読者にとって親しみを感じるのはないでしょうか。今後とも御健闘を心からお祈り致します。

来年は、大佛次郎の生誕百年に当たり、秋頃から展覧会・演劇など、いろいろな催しが企画されています。先立って、エッセイ・セ

※『大佛次郎

エッセイ・セレクション』1

歴史を紀行する 『幻の伽藍』

京都、平泉、バリ、そしてインドへ



レクションが出版されました。第一巻に「北方の王者」が掲載されております。そちらは、もう秋の気配でしょうか。

八月十九日

館)

旅を通して歴史を考え、透徹した眼で人間を見つめる珠玉のエッセイ69編。第二章は「義経の周囲」(小学館)

※『義経の周囲』は、昭和四十年に「朝日新聞」に連載されたものを一冊に纏めた名著。歴史画の安田鞞彦・羽石光志・真野満や小倉遊亀などの挿画も目を楽



「平泉の義経」安田鞞彦画(山種美術館)

と「金色堂詠歌」がございませうが、どちらも蘭僧正が作詞されたもので、金色堂和讃は「伝教大師妙華和讃」の節で、金色堂詠歌の方は「伝教大師誕生の詠歌」の節にのせて唱えることに、それも僧正さんの意向だったと思います。御詠歌も、福聚教会という組織のもと、盛岡市千手院の矢沢亮裕師の所が岩手支部として盛んにやっておられました。それで、このとき大会実施に際して中尊寺の方が陸奥本部ということになり、これが後に陸奥本部中尊寺支部という、今の形になるわけです。

本山での中央研修会に参りましたのは、昭和五十年九月です。菅田・丸岡の両先生にご指導いただきまして、最後に宗祖の御廟に詣りまして、「古き仏の教えより——大師讃仰の御和讃」をあげたときは、やはり、いつにも増して感慨深いものであります。

御詠歌の稽古は、夜七時半から九時半まで、というのが昔からの例でした。今のよう車というわけにもまいりません。夜道を、お寺に登ってこられるお年寄りの方々は、ご苦労だったことでしょう。昨今は世のなか万事機械化で

す。むしろそれだからこそ、御詠歌のように、耳と口と、こころをそえて唱えることが、尊く大切なのではと、そう思われるわけでありませう。今年また、山ひとつ越えた隣の〈戸河内〉という集落で、新たに御詠歌の稽古が始まりました。御詠歌は初めての人ばかりですが、だれでも最初は初心者なわけです。皆さんと顔をあわせみるのが楽しみなことでもあります。

(二老 常任院住職)



(産経新聞・時評／文芸誌)

「世を挙げて続く安易な賢治賛歌」
 『文藝』（夏号）は「ほんたうの賢治」と題する特集。どこに「ほんたうのほんたう」があるのか期待した。
 「宮沢賢治が長生きしていたって、ファシズムに走っていたとはぼくは思いません。複数のオーダーに順番に応えるというのが彼の仕事でしたから」「賢治を論ずるといふ個人的モチベーションは、どんなものがあるんでしょか」「辺境から中央に情報を伝えてくるネットワークみたいなものを、賢治は相当マテリアルに考えていたのではないか」など、同特集に参加した人たちの言葉には正直吐き気をおぼえた。

なにがオーダーか。モチベーションか。ネットワークか？マテリアル？生前は世を挙げて無視した詩人を、まるで自分が発見したように書き、そして自分の現在の生き方とは切り離れたところまでまつりあげる、今日の宮沢賢治論。（略）
 たりわけ知的遊戯の領域に引きずりこむ人たちの語彙や語りは軽快であるだけに気色悪い。（略）
 かりにその詩人を語るとするならば、覚悟がなくてはならないだろう。自分の現在の生き方と彼の生き方に「ほんたうに」関連があるのか自分はいま何をしているのか。大学の研究室で宮沢賢治を語ることに矛盾はないのか。学歴社会へ押し出しながら、子供に宮沢賢治を読ませる自分とはいったい



なんだろう、といったところをき
 びしく見据える必要がある。

(東奥日報)

「遺児らに募金を」
 頑張れたく鉢のお坊さんたち
 ◇十一月二十五日の弘前市は低気圧で冷え込みました。文化センターの帰り道、百石町から中央通りに向かって墨衣を着て編みがさをかぶり、素足にわらじ履き、手にたく鉢のわんを持った十二、三人のお坊さんがチリンチリンと鈴を鳴らして歩いて来るのにぶつかりました。その中のお一人がグリーンのに「天台宗交通」とのぼりを掲げていました。ごくろうさまです。
 ◇世の中には、地道に世のため人のため困った人たちを少しでも助けしようとする宗教の方もいれば、世の中を自分のものにしようと毒をまくとくとして、毎日こつこつと生活のために働いている人たちを苦しめ殺したり全財産を巻き上げる悪い宗教もあると思うと、歩きながら憤りを感じる次第です。
 ◇それにつけても悪いことをする政治家もいて、今の世の中どうなっているのでしょうか。悪いことはいつまでも続きません。たく鉢のお坊さんたち、どうぞお風邪を召さぬようお体を大切に頑張ってください。



〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係 〔人事・遂業〕

□ 教師補任

僧 正 利生院 住職 菅野 円融
 (七年四月二十一日付)

僧 正 大徳院 住職 佐々木賢有
 権大僧都 金剛院 住職 破石 澄元
 少僧都 法泉院 住職 三浦 春興
 大律師 長楽寺 住職 佐々木慎有
 (八年四月二十一日付)

□ 本山得度

(八月二十日)
 金剛院法嗣 破石 智照

□ 陸奥仏青一斉托鉢(弘前市内)

並びに教区研修会

とき 七年十一月二十五・二十六日
 会場 弘前市 薬王院
 参加 托鉢 二四名。研修会 三三名。
 ＊気温一、三度、小雪のちらつく弘前市。時節柄、
 宗教法人への関心が高かったせいか、配付したパ
 ンフレットに目を通すひとが多かった。

□ 布教師会／東北・北海道地方協議会総会
 とき 六月二十四・二十五日
 会場 一関市 瑞泉閣
 参加 四九名。

□ 一隅を照らす運動／宮城福祉大会 〈予告〉

とき 来る十一月十七日
 会場 仙台市 立正佼成会会道
 ＊法話 中尊寺貫首 千田孝信師
 ＊講演「真の健康は」東城百合子氏
 ＊清興 東洋舞踊 伊達太鼓

執務日誌抄

平成七年十月～八年九月

平成七年

◇十月

- 一 日 月次大般若会(本堂)
- 二 日 慈眼会(本堂)
- 三 日 鎌倉永福寺展関係者来山。
- 四 日 政労連東北地区学習会にて講話(円乗院邦世(於いっくし園))
- 五 日 鎌倉市文化財保護課主任調

査員福田誠氏ほか八名来山。

七日 岩手県西磐井三十三観音巡

り一行参拝。(山王堂、千手堂、
 金色堂、経蔵、大長寿院、白山神
 社、赤堂等の御朱印授与。)

十日 隣山毛越寺貫主藤里慈亮師
 晋山式(貫首、老分、執事長参
 列)

十一日 日本ホテル協会一行来山
 (ホテルオークラ会長ほか)

十六日 駐日スリランカ比丘代表、
 ウパテイッサ氏来山、貫首
 挨拶。

十九日 前九年、後三年役サミット
 (執事長盛岡出向)

二十日 山内白虎堂例祭
 第十回菊まつり開幕法要
 (十一月十五日まで)

二十一日 藤島亥治郎先生出版記念祝
 典に貫首列席。

賀会、貫首ほか一山七名盛岡出向。

二十二日 裏千家淡交会一関地区月釜
 一五〇名参加(松寿庵。)

二十四日 県知事増田夫人ご案内にて
 四カ国駐日大使来山(ニュー
 ジラント、スロヴェニア、インド
 ネシア、南アフリカ)

二十八日 秀衡公御月忌 金剛界曼荼
 羅供

二十九日 秋能申し合せ(能楽堂)

三十一日 故蘭貫主三十三回忌墓参の
 ため群馬常住寺に出向(二
 老常任院高円ほか)

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

鎌倉市緑化推進委員会一行
 来山。

二 日 菊供養会

- 三日 日能「秀衡」「猩々」、仕舞（地元「小桜会」）。
 菊まつり撮影会
 五日 平泉文化会議所主催セミンナー「東方」講演会（於本坊大広間）
 七日 （東京）浜野あぐり氏来山、金銀字経拜見。
 日光地区消防組合視察参拝
 八日 一山及び従業員研修（弘前市三内丸山遺跡）
 九日 初雪により境内送電線断線、停電
 埼玉教区第四部檀信従総代会参拝。
 十二日 菊まつり開催。十周年記念式典、増田寛也県知事、志賀節衆議院議員他ご臨席。
 十三日 一山常任院後住長生、梵焼供初行堂籠り（開山堂）
 十四日 町内一人暮らしと介護者の交流会（講話 円乘院邦世）

- 十五日 永福寺展資料返却（管財澄元出張）
 十八日 野村万斎襲名披露・盛岡公演、一山より六名出席。
 二十日 町民号（鎌倉方面）、執事長ほか参加。
 二十三日 天台会御逮夜、結衆法要準備常の如し。
 二十四日 天台会厳修（本堂）
 宇宙飛行士秋山豊寛氏参拝。
 二十五日 宗内一斉托鉢及び研修会。
 一山仏青会員他参加（弘前市内）
 平泉商工会三十五周年記念式典（総務春興出席）
 ◇十二月
 三十日 月例報告会
 一日 月次大般若会
 七日 薬師会（讃衡蔵）
 十日 中尊寺総代故鈴木嘉助氏葬儀、導師貫首（本堂）

- 十二日 山内年末風景、マスコミ一斉取材
 十四日 弥陀会
 十六日 境内遺跡予備調査及び遺物整理に芝浦工大金丸義一氏一行来山（二十六日まで）。
 十七日 臨時一山会議
 白山会（本堂）
 二十日 境内諸堂諸仏像煤払い（各社取材）
 二十二日 大正大学福田亮成教授ほか来山。
 二十四日 文殊会（経蔵）
 二十八日 恒例御供餅つき。
 三十一日 午後三時、総礼
 平成八年
 ◇一月
 一日 ○時、新年祈祷護摩供修行六時、東山町「若水送り」十時半、総礼。引き続き修正会 釈迦供（本堂）。
 筑波大岩崎美紀子氏来山。
 二十六日 文化財防火デー特別演習にて、中尊寺特設消防隊参加。
 二十九日 平泉郵便局新局舎開所式（執事長出席）
 三十日 故鈴木三郎前県議会副議長告別式
 水墨画家傳益瑤氏（中国）来山、貫首挨拶。
 ◇二月
 一日 月次大般若会
 三日 一山節分会法要（本堂）
 本日にて寒修行満行。
 JAS主催関西マスコミ関係者冬の東北観光視察来山。
 四日 恒例大節分会。関脇琴錦・琴の若・十両琴冠祐閑迎え、町内園児ら二、〇〇〇人の人出。
 五日 一山寺院婦人・職員本日よりお茶稽古（三月十八日）

- 七日 神事能シテ方稽古始まる。
- 九日 一山協議会
- 十日 日光輪王寺荻原貞興前門跡
一周忌法要に貫首列席。
- 十四日 涅槃会御速夜(本堂)
- 十五日 涅槃会(本堂)
- 月例法話の会(法泉院春興)
- 十九日 埼玉教区大聖寺御一行参拝
- 二十日 日光部寺院住職参拝。貫首
案内。
- 二十二日 中尊寺門前会研修旅行(山
形方面、貫首法話)
- 二十五日 菊づくり講習会。
(参加者一〇〇名)
- 二十六日 岩手日日新聞文化賞授賞式
- 二十七日 平泉町観光協会総会
- ◇三月
- 一日 月次大般若会
- 二日 平泉町文化会議所総会
- 五日 菊まつり協賛会役員会
- 六日 特別展企画で仙台市立博物
館出向(管財澄元、総務快俊)

- 九日 一山協議会
- 十四日 町文化観光施設等整備運営
委員会(執事長出席)
- 十九日 基衡公御月忌 胎蔵界曼荼
羅供 常の如し。
- 月例法話の会(大徳院後住慎
有)
- 二十日 定例一山会議(大広間)
- 二十一日 春彼岸会 法華三昧
- 二十二日 貫首、荒了寛師出版記念祝
賀会出席のため東京出向。
- 二十四日 開山会護摩供(開山堂)
- ◇四月
- 一日 月次大般若会
- 職員辞令交付並びに事務引
き継ぎ。
- 新任官公庁長、地元小中学
校転入者ほか挨拶に来山
- 三日 寺院婦人会岩手支部役員会
- 四日 小岩金網(株)東京新社屋落成
祝賀会、貫首ほか出席。
- 八日 佛生会

- 十一日 賢治追善法要について記者
発表(一関記者クラブにて)
- 十三日 陸奥仏教青年会総会開催。
- 十四日 青森三不動一行団体祈禱
(不動堂一四〇名)
- 十五日 観世鏡之丞氏、演能打ち合
せのため来山。
- 十七日 山内観音院、観音講
門前会(於岩間会館)
- 十八日 陸奥教区会・一隅理事会
- 十九日 一山寺院共済互助会総会
月例報告会
- 二十日 菊まつり協賛会総会開催。
- 二十一日 恒例花まつり
(貫首法話、参加四五〇名)
- 二十二日 ハワイパロ観音寺一行団
参。
- 二十四日 全文連東日本ブロック研修
会(於日光管財澄元参加)
- 二十五日 衣関老友会境内清掃奉仕。
「文化をデザインする会」
(代表黒川雅之氏)参拝。

- 吉永國光県副知事参拝。
- 二十六日 平泉町議会展正・副議長新任
挨拶のため来山。
- 毛越寺寿徳院(住職・南洞頼
教師)にて貫首招待法話。
- 二十八日 宮沢賢治生誕百年追善法要
賢治実弟清六氏、花巻市長
ほか参列。
- 二十九日 第十七回西行祭短歌大会
(講師・愛知女子短大教授 春日
井建氏)
- ◇五月
- 一日 春の藤原まつり開幕。
法要 稚児行列、常の如し。
- 二日 開山護摩供(開山堂)
- 三日 源義経公東下り行列。今年
より参道黒門にて下馬。
いわき太鼓、川西剣舞奉納。
式三番、神事能「竹生鳥」
(高円)
- 四日 天台寺瀬戸内寂聴師、晋山
十周年記念式典に貫首列

- 五日 神事能「田村」(前シテ那世、
後・澄照、ワキ秀厚)
- 六日 山王講(山王堂)
- 弁慶力餅競技大会。
- 七日 平泉周辺の観光を考える会
(執事長出席)
- 九日 寺院婦人会岩手支部総会
(於毛越寺)
- 十日 瀬戸内寂聴師文部大臣賞受
賞祝賀会。貫首ほか六名京
都出向。
- 十二日 宗務所長光中及び・澄順、
中国天台山参拝に出発(三
十日まで)
- 十三日 文化庁建造物課大和氏、石
造五輪塔調査のため来山。
- 十六日 出光裕治氏(出光興産社長)
貫首表敬訪問。
- 十九日 月例法話の会(瑠璃光院後住
康純)
- 農林水産省竹中大臣官房審

- 議官参拝。
- 二十二日 浄土宗兵庫教区、阿波之介
塚に墓参、献華(二五〇名)。
- 二十八日 月例報告会
- 三十日 山内願成就院本堂落慶法
要、一山総出仕。
- 三十一日 中尊寺杯ゲートボール大会
- ◇六月
- 一日 月次大般若会
- 福井県大野市歴史セミナー
一行研修来山(法泉院春興)。
- 二日 観世鏡之丞中尊寺奉演能
「大原御幸」、盛会。
- 四日 山家会
- 五日 東邦大学学長杉村隆氏参
拝。
- 滋賀県湖南消防組合一行視
察来山。
- 六日 教区寺院婦人会総会
エジプト大使夫妻参拝。
大正大学校外講座打ち合せ
に田中、藤原両氏来山。

- 七日 一山協議会
- 九日 ふるさと平泉会総会（東京）
貫首出向、講話
臨時教区会
- 十一日 全文連総会（東京、管財澄元出向）
- 十二日 五カ国駐日大使来山。貫首挨拶（インドネシア、タイ、グアテマラ、ニュージーランド、モロッコ）。
- 十三日 水沢市正法寺薫退・晋山式。貫首列席。
- 十四日 天台大師一四〇〇年大遠忌報恩中尊寺訪中参拝団出発（団長貫首ほか三二名、二十一）
- 十五日 文化庁長官吉田茂氏来山（執事長応接）。
- 二十日 自在坊蓮光忌法要
月例法話の会（薬樹王院後任澄照）

- 二十三日 第三回セミナー「東方」（中尊寺共催）、講演養老孟司氏「脳の浄土」、原子朗氏「賢治と中尊寺」（於ホテル金鷄荘）。貫首ほか一山多数出席。
 - 二十四日 東北布教師会総会（ホテル瑞泉閣）、貫首ほか出席。
 - 二十五日 日光輪王寺光輪会一行来山。
 - 二十七日 藤島亥治郎先生を囲む会、貫首ほか出席。
 - 三十日 『岩手の昭和史』出版記念祝賀会（執事長、盛岡出向）
- ◇七月
- 一日 月次大般若会
 - 二日 宮城県山田町婦人学級参拝。
 - 五日 江刺市金津流鹿踊り奉納。
 - 七日 平泉水かけ神輿披露式（於毛越寺レストハウス）
 - 十日 職員接客マナー研修会開催

- （講師 ベリーノホテル支配人 仁科伸一氏）
- 十二日 京都博物館員三名来山。金銀字経披見。
- 十三日 東北仏教青年会弘前結集（執事長、仏青会員参加）。
- 十五日 西磐井地方郡市仏教会ウエーサカ法要。貫首法話「釈尊の心」（参加者二五〇名）
- 十七日 清衡公御月忌 胎藏界曼荼羅供、常の如し。
- 十八日 大正大学、西郊良光理事、多田孝文講師来山。（大正大学情報研究棟建設資金特別寄付依頼のため）
- 十九日 日光輪王寺菅原信海師案内にて、前早稲田大学総長小山宙丸氏、同講師綾部光洲氏参拝。（貫首案内）
- 二十日 平泉総社神輿初渡御。金色堂着十三時四十分。
奥州藤原三代ゆかりの地・

- 三十一日 いわきサミット（執事長出向）
岩手朝日テレビ開局挨拶に来山。

◇八月

- 一日 月次大般若会
- 四日 「平和の鐘」鳴鐘、三時半
- 七日 結衆、夏安居（開山堂、十三日まで）
- 十日 梵焼供 結衆常の如し。拝観時間本日より延長（十七日まで）。
- 十四日 第二十回中尊寺新能能「玉葛」 狂言「樋の酒」能「国権」
- 十六日 前檀信徒総代長佐々木誠氏葬儀（導師貫首）
第三十二回大文字まつり。
- 二十日 隣山毛越寺施餓鬼会（二老観音院、二老常住院隨喜）
観世流梅若善高師一行参拝。
- 二十二日 東北地方修学旅行現地研修

- 二十三日 大施餓鬼会御逮夜
結衆法要準備に追われる。
- 二十四日 中尊寺大施餓鬼会執行。
仏教伝導協会一行、貫首の法話を聴講。
- 二十五日 部内観福寺本堂落慶法要、貫首導師。
- 二十六日 北海道修学旅行誘致説明会（参拝事業部慎有出向）
- 二十七日 賢治の学校追悼法要、一二名出向（花巻市、県野外活動センター）。
- 二十八日 農林水産大臣大原一三氏参拝、貫首挨拶。
- 二十九日 月例報告会
- 三十一日 町内竜玉寺大施餓鬼会（二老常住院隨喜）
山形県瀬見温泉亀割観音例祭（二老賢有出向）
「大正大学フェア in 仙台」開催（執事長出向）。

◇九月

- 一日 月次大般若会
- 二日 大正大学校外講座開講
—中尊寺と藤原文化を訪ねて—（第一日）
参加者二十四名。
- 三日 同講座第二日。貫首法話、泰衡公御月忌・金曼供法要隨喜、発掘調査体験学習。
- 四日 同講座第三日。早朝座禪、写経、毛越寺参拝、閉講式
- 五日 一山協議会
- 九日 元県知事故中村直氏告別式（二老観音院・執事長参列）
- 十日 紫波町五郎沼薬師神社例祭（二老常住院高岡出席）
- 十一日 評論家犬養智子氏参拝。
東北運輸局長小倉照雄氏参拝。
- 十五日 紫波町蜂神社例祭（三老大徳院賢有出席）
- 十九日 赤堂稲荷例祭

二十一日 平泉中学校統合二十周年記念式典、貫首ほか出席。

二十三日 秋彼岸会 法華三昧修行。

二十四日 中尊寺ゆかり寺社（石川県白山比咩神社、福井県平泉寺、岐阜県石徹白大師堂ほか）参拝。（貫首・一老・二老、円乘院邦世案内、随行秀厚。二十六日まで）。



平泉寺南谷古道（発掘）



石徹白大師講々長上村修二氏と



大師講々中の出迎えをうけて

曼荼羅結縁

趣意書

敬白

中尊寺におきましては、藤原清衡公・基衡公・秀衡公・泰衡公の御遺徳を偲び、毎年御月忌法要には、胎蔵界並びに金剛界曼荼羅供を厳修して、四代公の尊霊を供養し、皆様方の御安寧を祈願して参りました。

本年、その曼荼羅供の御本尊、胎蔵界・金剛界の懸幅曼荼羅図二幅を新調致しました。「曼荼羅」とは、仏の世界を具象的に過不足のない円の中に表し、我々人間が仏になるための道筋、また仏の慈悲が我々生きとし生けるもの全てに及ぶことを示しているものです。

この曼荼羅に縁を結ぶことは、私ども一人一人が尊い仏様との深い係わり合いを生ずる資となります。

皆様におかれましては、是非この千載一遇の機会に、曼荼羅との深いご法縁を結ばれますよう御案内かたがた、御芳志を勧募申し上げる次第であります。

合掌

平成八年 秋彼岸中日

天台宗東北大本山

中尊寺

(事務局 法務部)

浄財御奉納者 御芳名

平成七年	十月 文学の蔵(島崎藤村学会)様	三万円	三重県(株)七和工業	五万円
	江越 宗洋様	五万円	東京都 出光裕治様	三万円
	浦和高等学校第二六回生有志様	三万円	水戸市 多宝院護国寺様	三万円
	十一月 東京都 浜野あぐり様	二拾万円	宮城県 東雲寺様	三万円
	神奈川県博(吾妻鏡を読む会)様	三万円	北上市 高橋妙斎様	五万円
	中尊寺寺庭婦人会様	三萬五千元	水沢市 正法寺様	三万円
	十二月 今市高等学校様	三万円	日光山輪王寺様	三万円
			近畿ツーリスト「四季の華」様	四万円
平成八年	一月 電気通信共済会岩手営業所様	拾万円	近江鉄道協定会様	六萬四千元
	小岩金網株式会社様(節分会)	拾万円	(株)精茶百年本舗様	三万円
	二月 日光組寺会様	拾万円	西磐井郡市仏教会(ウエーサカ)様	拾万円
	三月 気仙沼観光協会様	三万円	横浜市 大聖院様	三万円
	四月 ハワイパロ観音寺松本恵心様	三万円	東京都中野区 禅定院様	三万円
	日光市中鉢石町中老会様	三万円	浄土宗岩手教区様	五万円
	一関信用金庫平泉支店様	三万円		
	和歌山市 上野栄一郎様他	五万円		
	五月 平泉郵便局様	五万円	一関市 (有)鈴木商会(鈴木佛具店)様	

赤堂稻荷鳥居奉納

不動尊祈願

平成七年九月〜平成八年八月	青森県 盛田悠三様	七万円
平成八年一月〜八月	川崎村 佐藤卓三様	四拾五万円
平成八年一月・四月	青森県 笠原山不動院 代表小笠原喜世様	壹百壹万円
平成八年	一月 一関市 山平様	参万円
	一月 衣川村 スキルグリストア 代表取締役 千葉茂様	参拾貳万円
	一月 衣川村 小岩金網株式会社様	参万円
	一月 栗原郡 (有)金盛工務店様	参万円
	五月 青森県 北山肇様	参萬五千元
	八月 一関市 大森忠雄様	参万円

▽「当たり前前」のことが「できる人になろう」

よく目にする標語だ。そうあるべきだと思う。当たり前前のこととは人に迷惑をかけることである。しかし、それがなかなかできない。煙草を吸う、ひとの嗜好は自由だが、周囲の人には迷惑にもなる。喫煙室以外では控えるのが当たり前なのである。

標語などというのは、モットーでありスローガンに過ぎない、と居直るひともいる。その言には、それさえも実行出来ない自分の意思の薄弱さを隠したいという鬱屈した心理が見え見えだ。それがわかるから、周りのひとはそれ以上追及しないだけである。

▽「うなじ膨れし僧ひとり 口を歪めてそらごとを云ふ」

賢治も手帳にそう書いた。「一隅を照らす」を他人に説くまえに、「当たり前前」のことが「できる人」であった方がいい。そうでないと、そらごとには聞こえない。

▽本号では、遠藤先生には自然に対する人間の愚かしさ、身近な、当たり前前でない状況を指摘していただいた。原子朗先生の「賢治と中尊寺」では、賢治の詩の哲学にはじめて触れたような思いで校正にあたった。志賀かう子さんの文章はまさに清々しい喜びに満たされる。お三方とも超御多忙のなか無理をお願いした。

〔佐々木邦世〕

中尊寺〈寺報〉『関山』第三号

十 一九九八 平成六年（一九九八）十月十日

発行 中尊寺

〒029-44 岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)

4194

五

十月二十日





発行 中尊寺